教職大学院
Newsletter No.84
福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2016.5.14

実践研究福井ラウンドテーブル
2016 Spring Sessions の実施報告

福井大学教職大学院 准教授　木村 優

2016 年 2 月 26 日（金）・27 日（土）・28 日（日）の 3 日間，実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions が開催された。

今回の実践研究福井ラウンドテーブルでは，26 日（金）夕方のプレセッション「教職大学院におけるプロセスコンサルテーション」を皮切りに，翌 27 日（土）には早朝から OECD 日本イノベーション教育ネットワークとの連携による福井クラスター教員研修で幕を開け，午前中には続けて，オックスフォード大学のハリー・ダニエルズ氏と白梅学園大学の無藤隆氏をお招きした Session 0 Keynote Speech「『学び舎として学校をリ・デザインする』，そして本会で初となる児童生徒によるポスターセッションが開催された。同日の午後は Zone ABCD の各セッションと懇親会も開催され，続く 28 日（日）は多くの実践者や研究者等が小テーブルを囲み実践報告と議論を深めていくラウンドテーブルも開催された。

今回の実践研究福井ラウンドテーブルには，事前参加申込と当日参加申込を合わせて 820 名の参加者に恵まれ，27 日（土）の Students' Poster Session で児童生徒たちの挑戦を見学に来られた保護者の方々を加えると 900 名以上の方々に御参加いただいたことになる。さらに，28 日（日）ラウンドテーブルには 444 名に御参加いただき，279 名の方々に実践報告をいただいた。2 日間の総参加者並びにラウンドテーブルの参加者数及び報告者数はいずれも過去 15 年の実践研究福井ラウンドテーブルの歴史において最高数であった。

実践研究福井ラウンドテーブルに御参加いただいた皆様へ

運営面で至らぬ点が多々ありましたが，御参加いただいたすべての皆様に温かなご助力をいただけたこと，厚く御礼申し上げます。また，本会の運営にあたり，事務手続き等でご助力いただいた教育地域科学部支援室スタッフの皆様，そして会場設営や受付業務等で目を見張る力を発揮くださいました学生・院生の皆様に心より感謝申し上げます。

目次

巻頭言（1）
ラウンドテーブルに参加して（2）
Session 0（3～6）
Students' Poster Session（7～15）
Zone ABCD（16～38）
ラウンドテーブル（39～41）
次回予告（42～48）

福井ラウンドテーブルに参加して

白梅学園大学　教授　　無藤　隆

今回，2016 年 2 月末の福井ラウンドテーブルに参加することが出来ました。私が参加したのは，オックスフォード大学のH．ダニエルズ教授とともにシンポジウムを行うことと，分科会でいくつかの議論に参加することでした。シンポジウムでは，学校の建築デザインと実践との関連について考えました。ラウンドテーブルでは，教職大学院のあり方とともに，幼小・小中・中高の連携接続の問題を考える機会を得ました。

まず，最初に伺ったのは，シンポジウムの前日に，福井市立安居中学校でした。かなり福井市でも農村部にある中学で，数年前に新しい建物を建てているのです。ダニエルズさんがまさにその研究をしているということで，興味津々に見て回り，我が意を得たりというように興奮をしてました。広い円形の真ん中は皆が集まるホールで，その外側に，教員室や教科ごとの部屋があり，その外側に一周する廊下，さらにその外側に教室などがあって，開放的に使われます。建物がオープンであるだけでなく，その使い方も時間割を持ちつつ，柔軟にグループや個人別の活動を組み合わせるようにしています。廊下などに貼ってある掲示物もすべて中学生が自ら貼っているのだと言います。授業の後は掃除ですが，ちょうど廊下を雑巾掛けしているところに出会い，改めて日本の学校での掃除の大事さに思い至りました。特筆すべきは，開設前の数年の準備期間とその後の実践の開始以降に，各々実践者と関係者が集い，あり方を定期的に検討してきたことです。素敵なデザインがそれだけに終わらず，実際に新たな実践のあり方を可能にする点がよく見えます。

シンポジウムでは，ダニエルズさんが建築デザインを確信した 5 つの学校のその後の検討の研究を提示してくれました。それらの学校はその後の実践の動きがかなり異なり，校長と他の教員たちの実践への志向により，建築の良さは活かされもするし，帳消しにされもするのです。「デザインと実践」の関係のあり方そのものが肝心であり，建築デザインが単体で実践をよくすることはない。といって，建築デザインは実践の可能性を作り出すものでもあり，その良さをいかに実践者が活かして，新たな実践を作り出すかの検討がなされました。

私はそれに対して，安居中学校に実践を思い浮かべながら，「学校建築デザインのヴィゴツキー的アプローチを拡張する」ことに向けて，ダニエルズさんの議論をこうまとめました。「学校の建築デザインの改革は実践の変革を伴って意義があることや，単に建築だけでは，可能性を作り出すが，それを活かさないことも出てくるのであり，実践を変革し続けることが必要なのである。」その上で，その考えを，我が国に活かすとしたら，建物を改築できない既存の学校での適用可能なとこで進めていけるだろう。それは室内の家具その他の移動や，思考のための板書その他の道具を用意し，子どもに手渡していくこと，教科自体を記号的道具と見なして，その獲得の柔軟で能動的あり方を模索することを提案しました。

Session 0

『学び舎』として学校をリ・デザインする

学校におけるデザインと実践を捉え直す—Session0 の概要報告

福井大学教職大学院 准教授　岸野 麻衣

Session0 では，「『学び舎』として学校をリ・デザインする」と題して，オックスフォード大学のハリー・ダニエルズ先生と白梅学園大学の無藤隆先生をお招きして，Keynote Session を企画しました。土曜日の午前中早い時間から行われたにもかかわらず，260 名ほどの多くの参加者にご参加いただきました。

ハリー・ダニエルズ先生からは「デザインと学校－学校教育の実践における学校デザインの変革」と題して，これからの新しい学習の在り方を実現するための学校デザインのもとで建築された学校が，実際にそこで教師や生徒が実践しはじめると，管理職の思いや使用する教師たちの思いによって異なる様相を示す事例をお話いただきました。新築や改築された４つの学校の事例と，伝統的な学校建築のもとで新しい実践が行われた１つの学校の事例が，写真も交えて紹介され，デザインと実践がいかに相互にかかわっているのか，考えさせられました。

この報告を受けて無藤隆先生からは，特別なデザインの学校に限らず，活動と思考は「文化的道具」に媒介されているのであり，学習環境もまた道具として捉えることができること，実践の過程でデザインの活かし方を変えていき，そこに教師や生徒や保護者が参加していくこと，それらをマネージメントしていくことの重要性をお話しいただきました。

福井県にも新しい学習の在り方を実現するために新しい学校デザインで実践を展開している小・中学校が複数あります。お二人の先生方には，前日，そのうちの一つであり福井大学教職大学院の連携校でもある福井市安居中学校をご案内しました。ハリー・ダニエル

ズ先生はご自身のプロジェクトとよく似た取組で，しかもデザインを活かした実践に挑戦している様子に大変感銘を受けられたようで，セッションの中でもたびたび安居中学校についても触れていました。

私自身も，一昨年ある国際学会でハリー・ダニエルズ先生の講演を聴き，福井で行われている実践とよく似ていることに大変驚き，知り合いの先生を介してコンタクトを取り，今回の来日が実現しました。これから求められる新しい学習の在り方に向けて，世界中で様々に学校改革がなされており，福井での挑戦もその中にあることを改めて実感しました。今回のセッションの話は，学校デザインと実践を相互に絡める中で私たちに何ができるのかを問うものであり，特別なデザインの学校の先生方に限らず多くの先生方にとって示唆に富んだものであったと思います。参加者の先生方が実践を問い直す機会になれば企画者としてこの上ない喜びです。最後になりましたが，ハリー・ダニエルズ先生の来日やセッションの開催に際して，福井市安居中学校の先生方，同時通訳や会場設営の方々，院生やスタッフの方々等，多くの方にお世話になりました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

Session０に参加して

埼玉県立新座高等学校　教諭　金子　奨

ハリー・ダニエルズ氏と無藤隆氏の Session０に参加して改めて考えたことは，建築はあるヴィジョンの「物化」（山本理顕）だということである。それは，したがって，そこに住まうものの活動や行動にさまざまな働きかけをしているはずだ。ところが，われわれは通常そのことにはあまり気づかない。なぜなら，じぶんはじぶんだけの意思にもとづいて活動し，行動していると思い込んでいるからだ。

しかし，両氏のセッションで明らかにされたことは，われわれの活動／行動が，さまざまな道具に媒介されてはじめて生成しているという事実であり，その道具には学校という建築も含まれているということだ。だから，あるヴィジョンにもとづいた学校デザインは，そこで営まれる子どもと教師の学びに深い影響を与えてしまうのである。何気なく住まっている学校建築という環境は，したがって，たえずわれわれを触発してあらたな学びへと誘うだろうし，逆に感覚を鈍麻させもする。

ハリー・ダニエルズ氏が紹介したイギリスにおけるいくつかの学校の例は，それを見事に示していた。

斬新なヴィジョンによる学び舎は，それに見合う質の実践をひとびとに要求するし，それによってあらたな次元を切りひらく学校が現れる。福井県においても深いヴィジョンによる学校が建てられてきたが，それは知識基盤社会に対応した実践を生みだすという要請にもとづいているのだろう。他方，建物からの触発に応じられない場合，住まうものたちは，それを遮断するために壁を設え，目隠しをし，動線を統制しようとする。その結果，伝統的な「四角いもの」のレベルの実践に立ち戻ってしまう。

こうした事態は，環境が実践の質を規定すると同時に，実践の質がそれに見合う環境のデザインを引き寄せるということを意味している。だから，無藤氏が指摘していたように，既存の四角く仕切られ標準化された学校においても，机やいすなどのモノの向きや配置を変えることによって，活動に応じた空間デザインの変更は可能だ。

ところで，ハリー・ダニエルズ氏と無藤氏は，セッション前日に福井市安居中学校を訪問されたという話であった。

思うに，安居中学校のデザインは一般的な学校とは異なり，「教科教室」が先にあって，その後に〈ひろば〉があるのではない。公共／交響圏ないし交換／交歓の場としての〈ひろば〉が内側にあり，その外側に教科特有の思考様式と語り口を洗練するための「教科教室」が設えられている。〈ひろば〉での出あいと交流は，「教科教室」でのより専門化した活動へと導かれていくように水路づけられているのである。

内／外の区別にかかわるわれわれの意識は，たとえばｎ－ＬＤＫというかたちで規格化された建築デザインによって強く縛られており，それが学校という場にも投影されがちである。そのことを振り返らせてくれる有意義なセッションだった。

Keynote Speech 「デザインと実践」から思う

福井市至民中学校 教諭　鈴木 三千弥

教職大学院を卒業して早３年が経とうとしているが，今回「実践研究　福井ラウンドテーブル　2016 Spring Sessions」に２日間どっぷりとつかる機会をいただいた。その中でも，１日目午前中 Session 0 「『学び舎』として学校をリ･デザインする」と題して，オックスフォード大学の Harry Daniels 教授と白梅学園大学の無藤隆教授による講演が一番印象に残っている。タイトルから見ても，私が勤務する福井市至民中学校（以下，至民中学校）の学校づくりや，専門職として学び続ける教師集団をどのように広げていくか，などを考えるヒントを得られるのではないかと大いに期待して参加した。そのセッションに絞って，私が感じたこと，考えたことを述べたい。

Daniels 氏のスピーチが始まるやいなや,「未来を志向して学校を建てるビジョン」という内容に驚かされた。そのビジョンとは，「変革と参加（学ぶこと，教えること，コミュニティ）」「学校が自分たちの場になる（自分たちで統制するようになる）」「開かれた柔軟な空間（自由に動ける」）などである。これらは，至民中学校が平成２０年「異学年型教科センター方式」の学校として移転開校したときのビジョンそのものではないか。その驚きと喜びは，至民中学校から一緒に参加し私の前に座っている２人の同僚教師の背中からも伝わってきた。

次に驚かされたのは，「学校のデザインはどうやって達成されたのか」という問いに対して，学校の平面図３枚が示されたスライドである。学習空間と生徒の動線を考えて学校のデザインがどのように変化し，完成していったのかがよく分かるものであった。また，学校デザインだけでなく，実践内容を示す項目に心が動いた。それらは，「プロジェクトをベースにした学習」「教科のクラスター」「コミュニティの関与」「分散化されたリーダーシップ」「学校のクラスターあるいはつながり」「学校の中の学校」などである。先述のビジョン同様，至民中学校が８年前に移転開校した当時のコンセプトそのままである。私は，至民中学校での日々の実践を思い起こしながら，Daniels 氏の話にどんどん引き込まれていった。

スピーチ後半では，Daniels 氏がデザインを革新した５つの学校とその研究を提示された。私を再度驚かせたものは，「学校 A」の平面図や校舎の写真である。曲線中心の建築や広々とした学習空間は，「至民中そのもの」だと思った。後ろの方からも，「至民と一緒や」という複数の声が聞こえてきた。

Daniels 氏の研究によると，５つの学校はその後の実践が大きく異なり，学校長と他の教員の実践への考え方によって，学校建築が活かされもするし，全く活かされない場合もあるとのことであった。つまり，学校建築デザインと実践の間には，しっかりとしたビジョンと調和，そして，教職員の協働体制がないと，学校は目的に沿わないスペースになってしまうと結論づけられた。

それを受けて無藤氏は，建物を改築できない既存の学校でできることとして，「道具」という考えを提示された。例えば，教師が板書している黒板を生徒に手渡し，思考を表現する「道具」として使い，対話を重ねるような授業づくりを実践する。また，教科自体を「記号的道具」と見なしてプロジェクト型の学習を実践していくことが大切である。最後に，建築デザインは実践を可能にする「道具」であるとまとめられた。

セッションの後，参加していた同僚教師２人と次のような言葉を交わした。

「今日の話は至民そのものだったね。」

「さあ，私たちに何ができるかな？これからどうしよう？」

「普通の（他の）学校と同じ事をするのではなく，至民中の建物をどう活かすかだね。生徒のために，そして我々教員のために，建物を活かす実践方法を考え，仲間に広めていこう」

現在，至民中学校は大きな変革の時を迎えている。だからこそ，恵まれた環境，すばらしい学校建築を活かしながら，授業や学級づくり，部活動など日々の実践に同僚性を高めながら取り組んでいきたいと強く感じた。

子どもが通いたい，保護者が通わせたい，教師が勤めたい学び舎を目指して。

Students' Poster Session

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』

福井大学教職大学院 准教授　木村 優

2015 年 6 月末に開催された実践研究福井ラウンドテーブル 2015 Summer Sessions の中で，福井市安居中学校の生徒たちと福井大学教育地域科学部附属中学校の生徒たちがそれぞれ，学校の紹介や各自の学びの成果をポスター報告し，たくさんの大人たちが生徒たちの報告に魅了された。さらに，ポスター報告後には各校の先生方の計らいで生徒たち同士の交流会がもたれ，そこでの語り合いが生徒たちそれぞれに価値ある時間になったとうかがった。

この素敵な出来事をうかがい，実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions にて生徒によるポスターセッションを開催できないかと思い，私自身が日々お世話になっている先生方に御相談したところ，「ぜひやりましょう！」と力強い言葉をいただけた。附属中学校・木下先生と至民中学校・堀先生と相談しながら，安居中学校（現・附属中学校）・加藤学先生に御助言いただき，さらに私どもの思いに賛同くださった附属小学校（現・附属幼稚園）・青木先生と豊小学校（現・附属小学校）・栃川先生からも御助力をいただいた。先生方とは，ポスターセッションの進め方を検討するのみならず，その後の交流会をいかに児童生徒たちにとって学び豊かな時間にできるのかを，時間を忘れるほど話し合い，私にとっては先生方と一緒に協働で授業をつくっているような感覚で，とても幸せな気持ちでいっぱいだった。

セッション内容の検討と同時にエントリー校を募ったところ，3 小学校（福井大学教育地域科学部附属小学校，福井市越廼小学校，坂井市立春江小学校）と 6 中学校（福井大学教育地域科学部附属中学校，福井市至民中学校，福井市安居中学校，福井市明道中学校，福井市美山中学校，坂井市立丸岡南中学校）からエントリーいただき，約 100 名の児童生徒がポスター発表をしてくださることになった。各校の児童生徒たちによるポスター報告は，それぞれの地域や学習内容によって特徴があり興味深く，そして児童生徒たちそれぞれにとってとても素敵な挑戦だった。

ポスターセッション後には，小学生は「ランチ de こうりゅう」と「きずなをつくる」という交流学習を，中学生は「グローバル社会を体感する！」と「夢 語ろう会」という交流学習をそれぞれ行った。詳細については，続く先生方の記事を読んでいただけると幸いである。

エントリーしてくださった児童生徒の皆様，保護者の皆様，そして学校の管理職の先生方，当日に引率いただいた先生方に心より感謝申し上げます。Students' Poster Session は 2016 年度も引き続き開催する予定です。どうぞよろしくお願いいたします。

ラウンドテーブル　「SPS（Student’s　Poster　Session)」

「夢　語ろう会」を終えて

福井大学教育学部附属中学校 教諭　木下 慶之

新たな子どもたちの素晴らしさを発見できた貴重な１日となりました。互いの学校文化，実践から学び，自分たちの学校での実践にこれからどうつなげていくか，どの子どもたちもそれぞれに新たな展望を持つことができたのではないかと思います。準備から当日，そしてその後を振り返りたいと思います。

本校における準備

昨年の春のラウンドテーブルのポスターセッションで，現在の３年生が本校の学年プロジェクトにおいて取り組んでいる「笑い」をテーマにした協働探究活動を発表させていただきました。また，音楽委員会の活動や学校行事も紹介させていただきました。ちょうど彼らは修学旅行前であり，旅行先での音楽ドラマの発表や，笑 time 劇場での PR もさせていただくこともできました。

その際に，安居中学校の生徒さんが食い入るように見てくださり，たくさんの質問をしてくださいました。同世代に伝える喜びを子どもたちは実感したようでした。また，安居中学校さんの報告を聴くことでさらにいろんな刺激を感じたようで，自分たちの学校でやっていることの意義を再確認し，また自分たちの学校のことをもっと知っていただきたいという気持ちになったようでした。ポスター発表後には，さらに空き教室で情報交換会が自然な流れで形成され，互いの報告を聴く場面が生まれたそうです（柳教諭に後でお聞きすると）。そんなことがきっかけで，「こんな場もせっかくなら，空き教室とかで設定で

きるといいよね」と，子どもたちのこのような姿をもとに，今回，意図的に教職大学院の先生方と現場の教員の協働企画として，SPS と夢語ろう会が設定，企画されました。

今回，本校では，１，２年生の学年プロジェクト，音楽委員会，音楽ドラマ，そして理科の授業で取組んでいるリトルティーチャーによる授業「解体新書」の実践の５つの部門が出場することになりました。始めての参加となる生徒が多いので，事前に主旨を説明し，その際に昨年参加した３年生の先輩にアドバイスをもらいました。「本当に伝えようと思ったら，私たちが当たり前だと思っていることや言葉が通じないことがある。だから，聴く人の立場に立って説明する内容や順番を考えるといいよ。」など，後輩たちはじっくりと聴き入っていました。放課後などを利用し，ポスター制作を進め，２回互いに見合うリハーサルを経て，本番に臨みました。

企画側の振り返りとしてですが，当初，参加校はなかなか定まりませんでした。初めての企画ですので，どのように各学校で広報するのか，同僚の先生方や保護者の方のご理解ご支援をいただくのかが，とても難しかったと思います。また，高校の執行部や SSH にもお声をかけましたが，この時期はテスト週間に入っているらしく，今回は残念ながら，小中だけでの開催となりました。

いよいよポスターセッション

当日は，予想以上の数の参加者（保護者の方も多く）となりました。ポスター発表はなかなか聴きにくい環境だったかもしれません。しかしながら，他校の児童・生徒さんが張り付いてじっくり聴いてくださり，子どもたちも張り切って表現，発信していました。意外にも，身内ながら附属小学校の子どもたちが，熱心に附属中学校の発表を聞いており，校内でもこのような場があると良いと気づかされました。また，今回初めて，子どもたちが「自

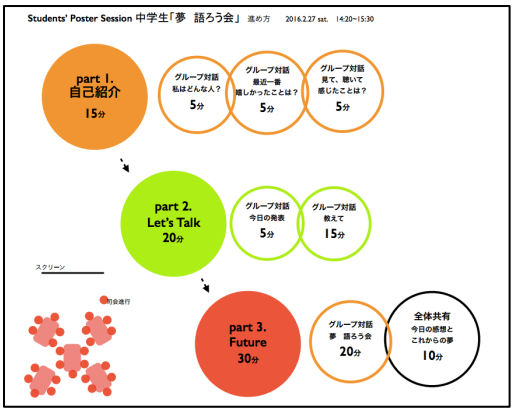
分たちの授業を語る」ことにも挑戦してくれました。授業における学びを子どもたちはどう実感しているのか，子どもたちはどんなことを学びたいと考えているのかを知ることができる場になりました。

その後のインターネット会議参観は，オール英語だったため，内容はなかなか掴みづらいようでしたが，「理科の授業でもあんなことできるといいですよね。」「自分たちも交流に参加してみたい」などの声を聴くことができました。

初めての「夢　語ろう会」

そして，いよいよ「夢　語ろう会」です。２日前の夜に木村優先生を中心に引率教員数名で集まり，「どういうテーマで，どんなグループ設定にすると，子どもたちにとって有効な会になるか」を相談しました。土台は安居中学校さんで行われている「思い出語ろう会」です。安居中学校の加藤学先生にご助言をいただきながら，流れやテーマを検討し合いました。その場で木村先生がパワーポイントを使って資料を作ってくださり，また，小学校の部担当の栃川正樹先生（福井市豊小学校），青木美恵先生（福井大学附属小学校）が子どもたちの視点に立ってさまざまなアイディアを出してくださりと，ワクワクするような企画がつくられていきました。

いよいよ当日，約５０名の中学生が参加しました。異なる学校のメンバーで座ってもら



い，そこへ引率で来ていただいた先生方にお一人ずつアドバイザーとして着いていただきました。「ファシリテーターは各テーブル有志でお願いします」とアナウンスし，「夢　語ろう会」がスタートしました。私が着いたグループは，最初は緊張気味でしたが，次第に打ち解け合い，「もう一度ポスターの所へ行って紹介し合わない！？」などのアイディアが生まれ，テーブルを離れ，ポスターツアーへと展開していきました。他のテーブルでは，普段あまり人前で話したがらない子が，一生懸命に自分の学校のことを他校の仲間に語る姿が見られ，自分の知らなかった子どもたちの新たな素晴らしい姿を発見することができました。あっという間の１時間２０分でした。最後に，各学校１名ずつ全体で感想を言ってもらいましたが，子どもたちが自分の学校を愛する気持ちと，これからの展望を熱く語る姿になんとも言えない感銘を受けました。翌週，子どもたちは感想を教えてくれました。

小沢（１年）：夢語ろう会では，グループのメンバーでとても楽しく会話することができました。ポスターセッションで，聞けなかったことを直接聞くことができて，各学校がどのようなものかが分かりました。みんなの夢は自分の得意なことを活かそうとしていて，自分のことをちゃんと分かっているんだなと思いました。私も自分の得意なことを探していきたいです。

水野（１年）：次，ポスターセッションする時は，委員会活動やノーチャイムなどの取り組みについても発表したいと思いました！

河野（２年）：他校の発表を見て，一人一人が自分の学校について堂々と語っている姿から，自分の学校が大好きなのだなと感じました。

どの子どもたちの感想からも，自分が学校でこれから何をすべきか，自分の学校の良さや改善点は何かを考えている様子をうかがうことができました。最後に，今回２度目の参

加だった音楽委員の辻さんの感想を転載させていただきます。この文章を読んで，ハッとしました。教師としての自分と重ね，自分がこれからすべきことは何かを改めて考えさせられました。「子どもの学びと教師の学びは相似関係である。」まさに，子どもたちの姿から学ばされた１日となりました。

「夢　語ろう会」を通して感じたこと学んだこと

福井大学教育地域科学部附属中学校　2年　辻　夢果

前回のラウンドテーブルでは，安居中学校の方々と交流会をしました。その時は，じっくりと安居中の教科ごとに教室を移動する形を知ることができました。今回のラウンドテーブルでは，たくさんの学校の文化や取り組みを知ることができました。また，ポスターセッションや夢語ろう会を通して，学校への愛や，文化を繋げよう，新しく文化を創っていこうという熱い想いを感じることできました。それと同時に，附中の良さを再実感することができました。私たちは，来期から３年生として附中の文化を受け継ぎ，考え，発信し，繋げていく立場となります。先輩から代々受け継がれた附中の文化をさらに良いものにし，発信していくために他の学校の文化を知り，良いところは真似しながら学校全体で考えていかなければいけないなと思いました。私は音楽委員として，これからも附中の音楽文化に誇りを持ち，学校中を巻き込みながら，文化の継承に携わっていきたいと思います。

初めての挑戦～ポスターセッションから学んだこと～

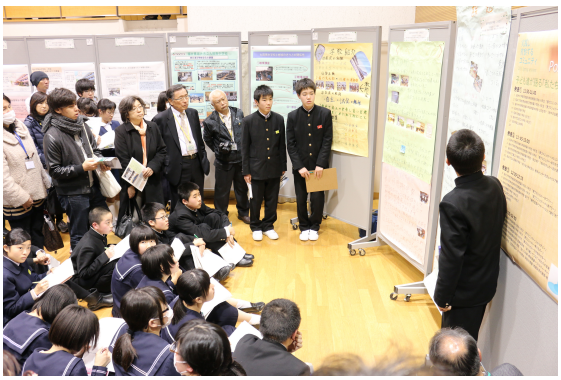
福井市至民中学校 教諭　堀 紘

至民中の生徒会として初めてクラスター長３人がラウンドテーブルのポスターセッションに参加する機会をいただいた。生徒も私もポスターセッションの雰囲気がどのようなものかもまったく分からず，イメージもないままの準備がスタートした。しかし，至民中の特色と生徒会の活動を紹介しようという前向きな気持ちで，全体的な学校紹介（教科センター方式・クラスター・校舎・部活など）・地域交流活動・至民中の課題という３グループに分かれて担当し，準備を行った。12 分の発表，３分の質疑応答を計画し，１グループあたり 4 分を担当することにして，各グループごとに紹介する内容をリストアップすることから始めた。準備は主に昼休みに行い，各グループでお互いに模擬発表をして，質問し合ったり，アドバイスをし合ったりしながら，和やかな雰囲気で進んでいった。

当日，至民中学校は，発表④のグループになり，発表①～③で附属中学校や丸岡南中学校，安居中学校の発表を聞き，それぞれに刺激を受けたようで，改めて自分たちの学校の特色に気付く姿や，他の学校の取り組みに興味をもち，自分たちの今後の活動についての展望をもつ様子なども見ることができた。また，原稿を作らず，相手の顔を見ながら，生き生きと語ってきかせるような安居中学校の生徒の発表の様子に感動し，自分たちもあんなふうに発表したいと話していた。自分たちの発表④の時間になると，先ほどまでは，元気があった彼らも会場の雰囲気に圧倒され，緊張してしまったようだった。発表が終わってから，原稿を見ずに発表をする練習もしてきたのに，うまく発表できなかったと少し悔しそうにしていたが，至民中の先生方や，サポート至民さんからのあたたかい激励やねぎらいの言葉をもらって，達成感を感じていたようであった。

その後の，「夢語ろう会」では，他校の生徒たちとじっくり交流をもつこともでき，学校についてからもラウンドテーブルでの話が止まらないほど，生徒たちはとても刺激的な１日をすごすことができたようだ。

今回，ラウンドテーブルへ参加したことで，私自身が学んだことも多くあった。安居中学校の生徒の自分たちの学校を語る姿や，その姿を見ている本校の生徒からは，自分の学校を語るということが，生徒たちの「愛校心」の育成につながっていると感じられた。その愛校心が，学校のリーダーとしての自覚を一層強くし，自主的な活動を行う原動力になると感じた。今後，自分たちの学校を語る機会や他校との交流なども取り入れながら，この経験を活かして，これからの生徒会活動の充実を図っていきたい。



Students’ Poster Session に参加して

福井市越廼小学校 教諭　川﨑 耕介

今回この students’ poster session に参加した目的が３つある。本校は海沿いに面した小規模校である。ただ，「人」，「自然」，「文化」，「素材」がとても豊かな地域である。このような地域に恵まれた児童は，すいせん交流(５月と７月に，岐阜県安八町の牧小学校と１泊２日の交流学習を行うもの)をきっかけに，地域の魅力を探す学習を始める。その学習過程は，児童と教師の協働学習であり，児童が自ら学習を進めてきたと実感できるものでもある。そのように，協働で作り上げてきた学習をふり返ることで，さらに深め，次の学習へのスタートがきれる機会を作り上げたかったことが目的の１つだ。２つ目は，自分達の学校や地域は他の学校に自慢できるものだと再認識し，自分達の学習や取り組みに自信を持ってほしかった。そして３つ目の目的は，他の小中学生の学習，発表の様子を見て，世の中にはこんなおもしろい人たち，こんなにすごい人たちがいるのだと，良い刺激や新たな目標を見つけてほしかった。特に，本校児童は，他校との交流が少ないため，他を知らずして，自分を顧みることが多い。そのため，今回のように同世代の姿を見て，協働の幅を地元，教師，児童間ではなく，外に広めることがよい刺激になると考えたからだ。ねらいは，見事に当たり，児童は自信と良い刺激をもらうことになった。まだまだ，思考を深める前に心から成長していかないといけない場面があったが，これから，地域，教師，児童間，そして，今回のように他校の児童との協働を進め，児童が自分で学び続けられたらと考える。また，そのことで，たくましく強く生きる力を育めたらと思う。今回，このような貴重な機会を与えてくださった方々に感謝したい。

Students’ Poster Session に参加して

坂井市立春江小学校 教諭　佐藤 宏美

今回福井ラウンドテーブルの Students’ Poster Session に参加したことは，４年生の子どもたちにとって大きなチャレンジとなりました。「ともに生きる社会を考える」をテーマに，福祉学習として学んできたことを，原稿書き・原稿の手直し・ポスターの制作・発表の練習と，３週間にわたって，休み時間はもちろん，放課後や家でも準備をしてきました。総合的な学習の時間に，異学年交流として３年生の前での福祉体験発表を１月末に行っていましたが，それとは違う内容で新たに原稿を書いたり，実際にいろんなところを訪

ねてユニバーサルデザインの設備を探してきたり，それぞれが，新しい視点を取り入れて発表を行いました。 学校外の人に見てもらうということで，今まで以上に大きな声で，相手に伝わるようにと工夫しながらしっかり練習に取り組んでいました。

当日，人の多さと，中学生や附属小学校などの高学年のお兄さんお姉さんの勢いに飲み込まれそうになりながらも，練習の成果を発揮して堂々とした素晴らしい発表をすることができました。発表自体は，満点をあげたいと思います。ただ，子どもたちにとっても指導者である私にとっても，乗り越えなければならない課題も見えてきました。質疑応答に臨機応変に答えられない。沈黙を打開できない。全体の場で，自分の思いや感想を話すことができない。引っ込み思案だから，恥ずかしがり屋だからという問題だけではなさそうです。たぶん，主体的な学びが少なかったのでしょう。課題意識が薄く，聞いたこと，調べたことを選んで発表しているだけだということが大きな原因だと，反省しました。

発表の後は，「きずなをつくる」をテーマに，小学生約４５名が１０のテーブルに分かれて，附属小学校６年生のリードのもと，自分の紹介・学校の紹介・他の学校の発表を聞いた感想・これからやってみたい活動などを

小グループで話し合いました。附属小学校６年生の，グループの中でのリードの見事さや，全体の場で行った話し合った内容の発表の素晴らしさなどを目の当たりにし，学校の中だけでは，なかなかできない貴重な経験をすることができました。人の話をしっかり聞き，進んでコミュニケーションをとろうと配慮し，疑問に思ったこと，考えたことをしっかりと自分の言葉で話している６年生の姿を見て，自分のこれからなりたい高学年像がはっきりとしたのではないかと思います。

今回参加した１２名の子どもたちが得た学びは，大変大きかったと思います。これからも，子どもたちには，ぜひ様々なことに進んでチャレンジをし，そこでしか得られない学びをたくさんたくさん吸収し，生きる力を育んでいってほしいと願っています。

報道ファイル

地域の魅力発信の取り組みを紹介する福井市越廼小の児童＝27日、同市の福井大文京キャンパス

福井大で小中生100人

学校での活動 熱く紹介

県内の小中学生が27日、福井市の福井大文京キャンパスで「私たちの学校・学び・未来」をテーマに、学校での取り組みを紹介した。総合学習や活動の様子をまとめた大きなポスターを使い、参加した児童生徒や県内外の教員らに学校の特色を伝えた。

教員や児童生徒、研究者らが一堂に会し、教育の取り組みを発表する福井大教職大学院の「実践研究福井ラウンドテーブル」（26～28日）の一環。ポスターを使った子どもの発表は初の試みで、県内3小学校と6中学校の児童生徒約100人が参加した。6、7グループごとに15分間の発表を4回に分けて行った。

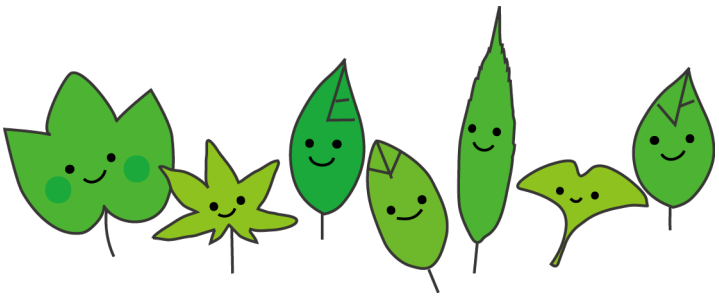
福井市越廼小の5年生は、岐阜県の小学校との交流を紹介。地元の魅力を伝えるためCM作りに挑戦し、施設や物でなく、漁師ら自慢の人にスポットを当てたことなどを懸命に説明した。

福井大附属中2年生は総合学習の「学年プロジェクト」で日本文化について調べ、ものづくり職人への聞き取りなどを通じ「進化・継承が大事」と紹介。職人の探究心や使う人のことを第一に考える姿勢に「日本人として誇りを感じた」と熱っぽく語った。

越廼小5年の金森のの子さんは「緊張したけど、しっかり伝えられたと思う。障害者に優しい取り組みとか、ほかの学校の活動も知ることができて良かった」と笑顔をみせた。同大学院の木村優准教授は「子どもたちが学んできたことを表現することは、プロセスを振り返り、学ぶ意味や価値を見いだすことにつながる。今後の学びの推進力にもなる」と意義を話した。（竹内史幸）

福井新聞より

2016 年 2 月 28 日



Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

校種を超えた教育を協働する

福井大学教職大学院 特命助教　綾城 初穂

Zone A はこれまで「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマにセッションを積み重ねてきた。その中から，これからの学校において教師同士の協働がいかに重要な意義を持つのかが明らかになってきたが，一方でその協働の視点は同一校種内に限定されていたのではないかという課題も新たに見えてきた。子どもたちの学びという視点から教師同士の協働を考えるならば，子どもたちの“育ち”，つまりは発達という縦軸も検討しなければならない。そこで今回の Zone A のセッションでは，「校種を超えた教育を協働する」というサブテーマを設定し，同一校種の横軸だけではなく，広く“発達”という視点から，校種を超えた教師同士の協働について考えることを目指した。

Session Ⅰ のポスターセッションでは，福井県内外の学校やセンターの先生方より，校種を超えた協働にどのように取り組んでいるか報告いただいた。過去最大規模の参加人数となったラウンドテーブルの熱気の中で，大勢のオーディエンスを前にそれぞれの先生方が実践を伝える姿がとても印象的だった。

Session Ⅱ のシンポジウムでは，シンポジストとして和歌山県立桐蔭中学校・藤蔭高等学校の岸田正幸校長と，長崎大学教育学部附属中学校の研究主任である鶴田浩一教諭から，それぞれの問題意識に根ざした豊かな協働実践について報告をいただいた。

岸田先生からは，中学校・高等学校における教師間の協働では 6 年間を通して一貫したカリキュラムを持ち，その中で子どもたちを育てていこうという意識を醸成することに難しさがあること，そして，教師たちが継続的で系統的な視点に立つ上でキャリア教育を主軸に据える協働が有効であることについて，オーディエンスを惹きつけるプレゼンテーションと共にご報告いただいた。また，鶴田先生からは小・中学校間の教師の協働について，小・中それぞれの良さを活かしながら，「無理をしない」で，互いを尊重しながら進めていくことの重要性について，研究主任としてのご自身の実践をもとにご発表いただいた。現場の声を拾い上げたアンケートはとても興味深く，やはりオーディエンスを惹きつけるものだった。そしてコメンテーターである白梅学園大学無藤隆教授からは，発表へのコメントを頂きました。さらに無藤先生からは，ご自身の経験に基づいた協働の難しさや校種を移行する際に子どもたちが出会う「適応」についての指摘，そしてこれからの協働実践

への提言について，学制への問い直しを含めた幅広い観点からとても意義深い問いかけをいただいた。

SessionⅢでは，5 人程度のグループに参会者が分かれ，SessionⅠ・Ⅱの熱気が冷めやらぬ中で，それぞれの思いや，各学校の取り組み，そして今後の課題について時間いっぱい（グループによっては時間を超えて）語り合った。SessionⅠ・Ⅱ・Ⅲと進み，互いの実践に耳を傾け，議論と共有を展開していく中で，校種を超えた教育を協働する教師のコミュニティが形成されていくプロセスが感じられるセッションとなった。

久しぶりの福井で自身をふり返る

カリタス小学校 教諭　寺田 進

十数年ぶりに福井大学を訪れた。前に訪れたのは真夏。本校（神奈川・カリタス小学校）が『総合教育活動』をスタートさせるにあたり，長野・伊那小学校からのご縁で松木先生にお会いし，そのご指導を仰ぐために同僚達と訪れたときだ。福井駅の改札を出ると松木先生が待っていてくださり，一緒にゲストハウスへ。のんびりする間もなく，すぐに研究会（検討会）が始まったのを覚えている。１泊２日という短期間だったが，中身の濃い，暑い（熱い）福井だった。

それ以来の福井。ラウンドテーブルの参加は初めてだ。あの十数年前と季節は違うが，やはり福井は熱かった。福井大学を中心として，「教育」を語る先生方の熱が高いことを感じた。

１日目の午後は Zone A に参加した。テーマは「校種を超えて教育を協働する」。幼保・小・中・高・大，さらに地域がいかに連携して子ども達の教育を協働するか。実践報告や語り合いの中で，「さて自分のところでは」と考える機会を頂けたと思う。

実践報告では和歌山県立桐蔭中・高等学校の取り組みと，長崎大学教育学部附属中学校の取り組みを伺うことができた。それぞれの学校の実践から学ばせて頂けることはたくさんあったが，どちらにも共通していることは「これでいいのだろうか？」と現状に疑問をもつことと，その疑問を解決するにあたっては「構築の苦しみ」があるということかもしれない。よく「現状維持は退化に等しい」と言われる。日々，教育環境は変化している。変化している中で現状維持がよいはずもなく，私たちは進化・発展しなければならない。

そんな報告を受けて，自身ははたしてどうなのか？とふり返った。私の勤務する学園は幼稚園から高等学校まであるカトリックの一環校である。キリスト教という宗教を背景とした学園全体の理念は，共有されている。しかし，具体的な教育内容についてどうか？幼稚園のモンテッソーリ教育，小学校の総合教育活動，中高の進学実績を高める教育。こう眺めると，統一感，連携はなかなか見えてこない。福井周辺の公立学校の中でも，その連携が模索されているところがあるのを聞くと，本来「学園」として１つになりやすいはずのところで，それが機能できていないことにもっと問題意識をもたなければならないと感じた。

幸い，昨年度から松木先生を学園講師としてお迎えし，今，その連携を構築していこうという雰囲気が生まれつつある。まだまだ，校種間の文化の違いや考え方の違いが障害に

なることもある。でも，それを構築していく苦しみを経ないと新しいものは生み出されない。そんな思いを，福井での熱い先生方との語りで感じさせられた。

「協働」に実践の裏付けを

北海道札幌白陵高等学校　教諭　　植井　真

一日，いや人生の大半の時間を学校の中で過ごす教師にとって，目の前の子どもの向こうに彼らが生きていく社会を想像することは，実は思いのほか難しい。大抵の教師は学校の囚われ人で，進学，就職，転勤などの節目はあるのだけれど，基本的に学校の文化の中で自らの役割が変化するに過ぎない。かくいう自分がまさにそれであり，塾・予備校で働いていた時期があるものの，どっぷりと学校の当たり前に染まっているから子どもが生きていく社会については簡単に想像することが出来ないのだ。

当然，様々な情報でそれらを知っていることは知っているのだけれど，「生きる力」が真に意味するところを実感として有しているのかと問われれば，甚だ拠り所がない。そういう教師である自分が「地域」に関心を持ち，水産科や家庭科の専門高校において教科や部活動で地域連携する中で「協働」という概念に出会った。私にとっては「連携」は臨時的にそれぞれの目的を達成するために貢献し合う活動であるのに対し，「協働」は恒常的に目的を共有して互いがコミュニケーションを取りながら貢献し合う活動である，と捉えている。そういう「協働」はようやく少しずつ地域の中で取られるようになってきているものの，学校の世界では目の前の日々の実践に埋没して言葉だけが上滑りしているように感じる。果たして学校は「連携」さえできているのだろうか。

今回のセッションでは活発な議論がそれぞれの実践を踏まえて行われたが，学校の校種

を超えた協働の在り方について，その輪郭を掴む状況にはまだ至っていないように感じた。教師の実践はあくまでも今，が中心になっているけれど，時制が点ではなくて過去から未来に流れる線として捉えられないと，学校が校種を超えて協働する状況にはなり得ない。そこに至るにはラウンドテーブルという「仕掛け」自体が，それぞれの省察を通じて繋ぎ合う場になるかもしれない。その可能性は大いに感じた。

教育に関する言説はいとも容易く語られることが多いけれども，その言葉に実践の裏付けが有るか無いかで全く異なる質量となる。教育実践者として私たちが取りうる態度としては，言葉が示す理念に相応しい実践を苦しい試行錯誤の中から編み出していくことではないだろうか。「校種を超えた協働」が，ある一定の共通理解を得られるようになるまでには相当の生みの苦しみを経ることになるだろうが，福井の地に集った様々な知の実践者がこの場を軸にして共鳴すれば，それは意外と早く実現するのではないかと感じた一日であった。

どんな人間を育てるか，考えよう
小・中・高の協働について考えたこと

板橋区立赤塚第二中学校 教諭　森田 直実

今回，福井ラウンドテーブルに参加するのは２回目である。昨年度の春のラウンドに来て以来，１年ぶりの参加となった。毎回，来て思うことは「一緒に頑張っている仲間が日本全国にいる」ということである。日本の子どもたちのために，日々研究をしている仲間がいるということを心強く感じる。そして，「負けてなるものか」という気持ちも強くなる。今年の春のラウンドテーブルでも，もっと子どもたちに力をつけていきたい，日本をよい国にしていくためには何が必要なのかということを考えるよい機会となった。

SessionⅡでは，中高一貫校の和歌山県立桐蔭中・高校の岸田先生，長崎大附属中の鶴田先生からの発表があった。岸田先生は中学と高校の連携を，鶴田先生は小学校と中学校の連携について，とても参考になる発表があった。中学と高校の連携では，キャリア教育を軸に，「これから先の人生をどのように生き抜いていくのか」という自己で進路を切り拓くために必要な教育をしているとのことで，義務教育を卒業し，新たなスタートを切る中学・高校という時期にはふさわしいものだと感じた。小学校と中学校の連携では，小学校との連携を始める難しさをあらためて感じた。小学校と中学校と，授業の１単位時間が違うことや，放課後の時間の生活が違うために，研究の時間がもちにくい。さらに，中学校では進路などがあり，小学校とは行事の流れがちがうことなど，たくさんの困難がある。しかし，長崎附属中はその困難を克服し，研究を進めることができている。この実践からは学ばなければならないと感じた。赤塚第二中学校は，同じ敷地内に小学校が設置されている。中学校からも小学生が遊ぶところや体育の授業をする様子が見られる。近くにあるのに，小学校のことを知っているか，小学校の先生のことを知っているかと問われても，おそらく自分は適当なことしか答えられないだろう。小学校と中学校は違うものだという意識が，どこか私の中にあるからだと感じる。困難を少しずつ，無理なく解消し，小学校との連携を深めていくことが必要だと痛感した。

SessionⅢでは，小グループでの実践を語り合うことができた。私のいたグループでは地域は違えども，小学校，中学校，高校，大学と４つの校種の教員がおり，それぞれの立場からの連携について語り合い，考えることができた。校種ごとに抱える問題は異なっている。その抱える問題が，校種の連携をスムーズに行えない一つの原因ではないかと考えた。また，質問にも出てきた「どのような人間に育てたいかというグランドデザイン」ということも話題に上った。どのような人間を育てるか明確な目標を作ることが，これからの教育には必要なことになるのでないかと感じた。教科も含め，どのような人間を育てていくか，現場から考えていきたい。

Zone B 教師教育

21 世紀の教師教育をイノベーションする：教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成

育成指標は教員研修を変えられるのか

福井大学教職大学院　准教授　小林 真由美

Zone B では，生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から，中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」を踏まえ，上記をテーマとして議論を深めていった。

Session Ⅰ では，独立行政法人教員研修センターから実施事業の紹介について，横浜市教育委員会から校外研修と校内研修の連動について，京都府総合教育センターから単位制履修制度と研修履歴について，ポスターセッションを行っていただいた。福井大学からも教員養成スタンダードについて発表した。

Session Ⅱ では，文部科学省の常盤高等教育局長，教員研修センターの高岡理事長，横浜市立浦島小学校の平本校長，福井県敦賀市の上野教育長によるシンポジウムが行われ，教育改革と教員養成改革の一体的推進について，教員研修センターの抜本的機能強化に向けた養成・採用・研修関係機関間ネットワークの中核拠点について，横浜市の人材育成指標と教員研修体系について，福井型１８年教育を踏まえた縦糸の研修体系の必要性について，それぞれお話があった。

Session Ⅲ では，先の２つの Session を受けて，小グループによるセッションを行い，それぞれが各自の取組と課題に照らし合わせながら議論を行った。

時宜にかなったテーマとそれに基づく議論は，各人の課題意識に呼応し，全体として有意義なセッションを行うことができた。

学校を学び合う共同体に

横浜市教育委員会事務局　安冨 江理

教師の学びは，まさに「実践し，省察する」ことによってなされる。Zone B は，「育成指標は教員研修を変えられるのか」というサブテーマが設定されていた。教員の育成には，「育成指標」を目標設定に活用し，実践したことをラウンドテーブルのような，「コミュニティ」の中での協議によって省察し，学び合うことが必要である。教員研修も目標を設定し，実践し，省察し，次の目標を設定するといった学びのサイクルの中で営まれることが大切である。ポスターセッションでは，横浜市の教員研修について，発表させていただいた。「教員のキャリアステージに応じた人材育成指標」に基づく研修では，目標を設定し「実践し，省察する」ことを基本にしている。組織内の役割でキャリアステージを分けていること，校外研修と校内研修を連動させ，OJT が進むように仕掛けていること，大学との連携・協働などをお伝えした。発表させていただくことによって，研修の方針や考え方を見直し，整理することができた。また，セッションによって取り組んでいることの価値や課題に気付くことにもなり，感謝している。

管理職には，地域，大学，専門家などの様々な力を借りて，「チーム学校」としてマネジメントを進めていくことが求められている。このラウンドテーブルには，様々な立場の方が集まり，セッションを行っている。その中で，発表者の実践が価値づけられている。さらに，協議に参加している誰もが，それぞれの立場や視点から発表者の実践を聞くことによって，自分の経験を振り返る機会ともなっている。子供たちのポスターセッションは，どの姿も素晴らしかった。中でも，自分の学校に誇りをもち，校舎・環境を十分に生かして学んでいることを伝える中学生の姿に感動した。オープンスペースの学校は，教員が異動してしまうとそのよさが伝わらなくなってしまうことがある。しかし，この中学校は，校舎に対するマインドが生徒間で引き継がれているので，教職員と協働して学びに取り組むことができている。さらに，研究テーマも共有されているので，学び合い・高め合いなど授業で大切にしたいことや省察の視点が明確になっている。子供も主体者として，共に学校づくりをしていることを学ばせていただいた。

様々な立場の方に学校経営に参画していただき，学校が学び合う共同体となることの意味や価値を，改めて感じた貴重な２日間であった。

独立行政法人教員研修センター基幹研修課長　高井　修

このたび，独立行政法人教員研修センターでは，「Zone B：教師」を中心に，ポスターセッションとシンポジウムに参加させて頂きました。また，福井ラウンドテーブルでは，その中で中身の濃い講演やシンポジウムに併せて，少人数による「テーマ別の話し合い」の場が設けられていました。この「テーマ別の話し合い」では，福井大学の教職員はもちろん，他大学の教職員，小・中・高等学校の教員，都道府県等教育委員会の職員等，幅広い参加者が，６人程度のグループを構成し，前半の講演等を聴いた上で，意見や感想を持ち寄るところから始まります。話は徐々に，自身のそれまでの取組の振り返りや，現在の活動に関する疑問，今後の活動へのヒントと，広がりを見せていきます。テーブルの進行はファシリテーターが行い，議論の広がりを妨げないように配慮しつつも，時折 Zone の主テーマにも触れるような工夫がされます。私が参加したテーブルは，大学教員，県立学校教諭，県教委職員，私というメンバーで，大学と教育委員会との連携，教職大学院制度，指標に基づく教員研修の実施等について議論し，課題や悩み等を共有しました。特に，大学と教育委員会との関係や，スタートして間もない教職大学院制度等，私にとって振り返りや発見に富んだ時間となりました。

児童・生徒同様，大人の学び合いの機会においても，主体的・協働的な仕掛けをより多く取り入れる事が，理解を深めるためには効果的であると考えます。一般的なこの種のイベントでは，参加者一人ひとりが考え，理解する事に留まる場合が多いかと思いますが，ラウンドテーブルでは，単に講義を聴くだけでなく，様々な立場の参加者同士で話し合い，自身の取組に対する考えを深め，次の行動に繋げるきっかけを作っているという点において，意義深いイベントだと感じました。

今回，このような機会を頂いた事に感謝すると共に，本イベントの益々の継続と発展をお祈りします。

Zone C　コミュニティ

学び合うコミュニティを培う

C1　持続可能なコミュニティをコーディネートする

若い世代と地域を結ぶ

福井大学教職大学院 特命助教　半原 芳子

Zone C はこれまで各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を，地域・世代・領域を超え共有し検討し続けている。そして，ここ数年はコミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て，互いの実践から学び合っている。私たちが地域や職場で出会う課題はより複雑化・高度化しており，もはやある一つのアプローチで解決できるものではない。そうした状況において,地域の発展を支える自治や学習の持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言える。この問題意識と視点を引き継ぎながら，今回 Zone C は，C1 として「若者と地域」，C2 として「地域と学校」という互いに重なり合う 2 つのテーマを設定しました。AOSSA を会場とした「若者と地域（C1）」では，地域の活性化を支える若い世代の実践報告とそのような実践を支ようとする大学・公民館等の取り組みとが交わりながら，世代をこえて広がる学び合うコミュニティの価値とそのコーディネートをめぐる課題が共有されました。

Session Ⅰ のポスターセッションでは，福井大学の学生による「探求ネットワーク」の活動や福井市・越前市・池田町・勝山市の公民館およびふくい市民国際交流協会の取り組みが報告されました。県外からいらしている方々は,福井の学生や公民館主事の実践の確かさとその地域力に驚かれていました。

Session Ⅱ のシンポジウムでは，福井県連合青年団の山田絵美子氏と東京学芸大学の倉持伸江氏をシンポジストとしてお招きしました。山田さんは青年団に入ったきっかけや現在の青年団の詳しい状況を等身大の言葉で語ってくださいました。印象的だったのが,青年団においても世代継承の壁（課題）があるということでした。その課題解決に向けた試行錯誤の歩みは,同じ課題を抱えている実践者達にとってとても共感できるものでした。倉持先生からは東京学芸大学の生涯学習・社会教育の授業における取り組みが紹介されました。そこでは学生が市民と連携し活動しながら「実践力」および「相互主体的な学び合う力」を培っていくというチャレンジが積み重ねられています。地域を編み直しながら大学の可能性を拡げていくその取り組みは示唆に富んだものでした。両報告によって若い世代が主体的に活動を進め地域に参画していることの意義が確認されるとともに，新しい世代の活動をどのように支えていけるのか，また，それをどのようにコーディネートしていけるのかといった問いがフロアと共有され，Session Ⅲ のクロスセッションに移りました。そこでは 6 人程度の小グループで実践を交流・共有しました。はじめは距離をとって座っていたのが，次第に頭を近づけ合い互いの報告にじっくりと耳を傾け合う姿が印象的でした。

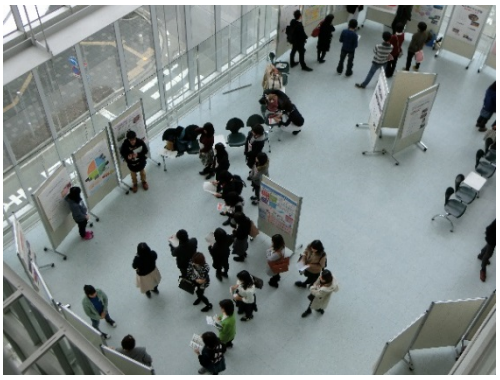
たくさんの「気づき」を得られた福井ラウンドテーブル

目白大学大学院 院生　大宮 明日香

今回で 2 度目の福井ラウンドテーブル。前回の 6 月に引き続きで参加してしまっても大丈夫なのかどうかという不安がありましたが，いざ始まると，その心配はすぐになくなりました。日々の業務に追われてしまい，自身の実践を振り返って整理することはなかなかできないのですが，報告準備のためにじっくりと省察することができました。様々なバックグラウンドを持つ参加者の方々と出会い，交流することができ，多くの学びがある非常に充実した 2 日間でした。

Zone C1 のポスターセッション，シンポジウムでは，「持続可能なコミュニティ」について若い世代と地域を結ぶということで，地域のために，これからの若者たちのために，公民館や青年団の方々，福井大学探求ネットワークの学生たちが取り組んでいることを自分自身の現状と比べながらお話を聞かせていただきました。素直に，様々な工夫を凝らして試行錯誤しながら活動していることの発表に，大変感銘を受けました。また，福井市では 1 小学校区ごとに 1 公民館が設置されているということに驚きました。なぜならば，私が住んでいるところや職場の地域では，小学校区ごとに公民館があるという話は，これまで聞いたことがありません。学校と地域が連携して取り組むことや，その繋がりが希薄になる中，首都圏と比べて，福井は学校と地域が密につながっているのだと感じました。

私は大学院で自身の研究に取り組んでいる傍ら，平日は社会人として職業を有し，日本へ留学に来る外国人留学生に日本語を教えています。1 日目のクロスセッション，また 2 日目の報告は，前回 6 月のラウンドテーブルに参加させていただいた際に得たものをきっかけに行った実践を報告いたしました。夢や目標を持って自身の勉強だけではなく，日本での就職や定住を考えている留学生もいれば，なんとなく…で日本へ来てしまった留学生もいます。20 代前後の若い外国人留学生が日本へ来て，外国での勉強や生活をどのように指導し，支えていくか。同じテーブルのメンバーに真摯に聴いていただきました。地域，業種，分野の異なる方々との語り合いで，私自身も日本語教育の分野もまだまだ伸びしろがあるなと痛感し，今回のラウンドテーブルを通して初めて気づいたことも多々ありました。また，他のメンバーの貴重なお話をたくさん伺うことができ，大変有意義な時間を過ごす事ができました。



各々が取り組んでいる内容は一見，違うように見えますが，課題への取り組みであるとか，またはそのぶつかりや戸惑い，苦しみ，課題を達成出来たときの喜びなど，根底に流れる思いは共通するようです。参加の機会をいただけて，新たな共同探究ができたことを大変光栄に思っております。そして，たくさんの刺激と学び，また次への活力と新たな課題をお土産にもらいました。またチャンスがあれば，また福井ラウンドテーブルにぜひ参加したいです。

ともに学び続ける

中国帰国者支援・交流センター　金井 淑子

福井ラウンドテーブルに初めて参加し,学生や若い世代の具体的な実践活動を知るよい機会となりました。中でも特に印象深かった「探求ネットワーク」について感想を述べます。

福井大学では，教育の一環として学生を県内の多様な場に派遣し，様々な活動を通して，学生を様々な人たちと向き合わせる「探求ネットワーク」と呼ぶ実践教育を行っています。そこでは活動の企画，運営その他の活動を，学生の自主判断に任せて進めています。

探究ネットワーク活動の一つで，附属特別支援学校で障害児を対象に行われている「ふれあいフレンドクラブ」の「ふれあいタイム」の活動では，学生のサポートの下で掃除屋，駅員，解体屋，ダンサー，画家などの仕事を児童にさせています。集団が苦手な児童をも考慮して活動は個別対応で行われていて，「ふれあいタイム」への不参加も認めています。仕事によって得た報酬を仕事をした児童に渡し，使途を児童の希望に任せていることが参加児童のモチベーションの向上に寄与していると思いました。学生たちは児童の自主性尊重を第一として様々な苦労を重ねながら児童とのコミュニケーションに工夫をこらし，サポートを行っていることに感銘を受けました。

同じ探求ネットワークの「かみすき（紙漉き）」は，児童が紙を実際に漉き，できあがった紙で様々なものを作る活動で，作るものは児童の個性や自主性に任せて，参加児童の希望や考えに応じて変えていくようにしています。主に小学４～６年生を対象としているが，実際の参加者は小学１年から高校１年生まで広がっているそうです。参加者の弟妹や以前参加した児童が再度参加するリピーターがいるためです。リピーターが自然と新規参加者を指導するなど，活動がよい方向に循環している様子がうかがわれました。参加児童の自主性を尊重して活動が進められていて，児童にとって活動自体が面白いことが，その理由のようです。スタッフの考えに固執せず，児童のアイデアを取り入れ，季節によって活動内容を変えたり班単位の作業を加えたりするなど，活動の目標設定などを試行錯誤しながら進めている。いずれの活動も活動内容を児童の自主性を重視して進めていることが成功の要点と思いました。

学ぶ人をリスペクトし，自主性を尊重することが最も重要であることを，私は長年にわたる地域の日本語教室におけるボランティア活動を通して実感してきました。Zone C で報告されたどの活動も，活動の対象となる人の自主性を尊重し，上から目線でなく相手をリスペクトすることを大前提に進められていること，また，首都圏では退職後のシニア世代や子育て終了後の人たちによるボランティア活動が多い中，若い人たちによる様々な活動の状況を知ることができ，ボランティア活動の広がり，前進を感じることができて勇気づけられ，私にとって有意義な機会でした。

C2　地域と学校はいかに学び合うのか

大人も子どもも育ち合うコミュニティへ

新しく生み出された，予感に満ちた場

福井大学教職大学院 非常勤講師　冨永 良史

新しく生み出された C2 のセッション会場として，新たな教室が割り振られた。奥行きが深い細長い空間に，机と椅子が整然と詰め込まれている。ゆるやかな一体感の中で触発を生み出すためというよりは，かっちりとした論理を伝達するための空間に見えた。C2 が目指すのは，そのような場ではない。前日の設営で，机を運び出し，椅子だけを教室の斜め前の柱を起点に放射状に並べた。本来の教室の中心から横にズレた起点に立ち，目前に広がる無人の椅子を眺めながら，明日ここで語られる物語が，場に響き渡っていく光景を思い浮かべた。

翌日，「地域と学校が学び合う関係を結ぶために，大人も子どもも育ち合うために，私たちは何をなしえるのか」を語り合う場が幕を開けた。セッション 1 では，地域と学校をつなぐ多様な実践を報告するポスターと発表者が，入り組んだ路地のように広がった。その路地を多様な関心を持つ参加者が行き交い，立ち止まり，耳を澄ませ，見入り，問いかける光景は，混沌としながらも，互いが互いに関心を持ち合う豊かさをたたえていた。

セッション 2 からは，昨日のうちに設営された教室で行われた。全国から約 80 人の参加者が集った。教師，学生，公民館主事，研究者，様々な形で学校に関わる地域住民。多種多様な分野からの参加者が，肩が触れ合うように密集して，席に着いた。市立札幌大通高校の平野淳也教諭から，「より社会に近い学校にするためのしかけ」が語られた。札幌の街を学校にとっての資源と捉え，共通の大目標を提案しながら，企業や街づくり組織など，多様な主体との関わりを広く展開していく語りは，まるで街が校舎になっているかのように聞こえた。福井市の安居の里を守る会の重森さんから，地域の豊かな自然を活かして，子どもたちに自然体験の場を提供する活動が語られた。ビオトープを作り，ホタルの一生を幼虫から光を放って飛び交う成虫になるまで観察するなど，自然との共生への意識を自然に生み出しているように聞こえた。いずれの報告も，街や自然という自らが拠って立つところへ向けて，自らを開き出していき，そこでこそ学びが生み出されている点において，相通じていた。参加者は，ひとつの報告を聞くたびに，近くの人と膝を寄せ合うように感想や気づきを語り合い，全体でいくつかの声をわかちあいながら，地域と学校のこれからについて，思いを深め，重ね合わせていった。

セッション 3 は，小グループに分かれて，地域と学校をめぐる互いの実践を対話した。対話を始める前に，参加者全員で協力し，椅子の配置を放射状から小グループ状に設営し

なおした。参加者自らが創り出した場で展開される対話は，準備された場でのそれよりも熱を帯びているように感じられた。終了時刻だけが知らされ，いつどのように幕を閉じるのかは，各グループに委ねられた。近接するグループの語りが聞こえる環境では，無意識のうちにグループ間での触発を生み，会場全体が対話の渦のように響きあった。

地域と学校は，どちらが中心でもなく，重なり合い，混じり合い，その関わりは時に混沌としながらも触発し合い，自らが拠って立つものへ自らを開きだすことで学び合い，育ち合う。そのような場を，互いの協力のもとに自ら生み出す。自らが生み出した場だからこそ，自在に展開していける。新しく生み出された C2 という場は，そんな予感に満ちていた。

ラウンドテーブルに参加して

板橋区立赤塚第二中学校　学校地域ボランティア　染宮　利章

初めに，福井大学院の木村先生・半原先生そして赤塚二中校長宮澤先生には，ラウンドテーブルの参加の機会を頂きました事にこの書面をもって感謝の意を表します。

Zone C2 では，地域と学校はいかに学び合うのかという議題の中，フォーラムの際に福井大学生の実践研究発表と至民中サポーターの活動報告を拝聴いたしました。

ここで気付いた点は二点あります。

まず，福井は福井大学を中核とする学びのコミュニティが充実している点です。東京には多くの大学が存在しますが，残念ながら同様の体制を構築する事は現状不可能でしょう。様々なことが東京は大きすぎ，多すぎます。福井は地方都市の利点を最大限生かしていると感じました。二つ目は環境の違いからくる文化の多様性を実感した点です。福井の公民館制度は大変機能していると思いましたが，東京にはどう当てはめていくのかは，今後模索しなければならない課題でしょう。

さて，ここで小職の活動に関して少々記します。

数少ない東京区部の中で，所有農地を活動拠点として，赤塚二中生に野菜収穫させそのまま給食食材として納品，翌日の給食となり食すという一連の流れを体験させ，納品作業には金銭が発生する事を伝え経済活動であることも意識させます。しかし常に疑問を持ち続けている事があります。赤塚二中生を取り巻く環境は，福井とは全く異なり，近隣には無限の飲食・ファーストフード店舗が乱立し，蛇口や手動スイッチすら存在しないフルオートの新築マンションが多々存在します。その環境に育つ彼等は，果たして農業体験など単に授業の延長的位置づけであり，その域を超えていないのではないか，という点です。あまりに生活とかけ離れすぎていると思えるのです。

教育の詰込型から創造発想型への転換と言う観点から確かにこの活動が有意義であろう事は理解できます。しかし学問水準が高度な生徒は，物事を第三者視線で捉えることが一度で可能でしょうが，一時の体験で実学探究を汲み取れない生徒は長期に亙って体験させなければなりません。小職単独では数的限度があり，時間的制約の中での限界を痛感します。

東京で行うことの意義をどう捉え直し，学校側への後方支援にどう直結させるか。介入

しすぎず，しかし待つだけではなく程良い距離感を保ち，推進させるか。教えることは教えられることの基本概念を自らも再探究し，生徒たちにバーチャルではない行為行動から得られる体験を通し，利便すぎる東京で育つ彼等にその特異性を理解させてゆく事こそ真の教育と言えるのではないかとこのラウンドテーブルで再認識いたしました。

現在，赤塚二中は，福井市の至民中や安居中との交流を大切にしている学校文化があります。この交流は永遠に続けて欲しい活動です。文化的価値観の違いを持つ同世代の交流により，相互に感じ取らせる事こそ我が活動における最大最高の源泉であるからに他ならないからです。

「つながる，広がる，続ける」

国高小学校PTA　坂下 淳子

今回初めて，実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。シンポジウムでは，市立札幌大通高等学校の平野先生が定時制高校と地域との関わりについて実践している現状を，安居の里を守る会の重森さんが体験学習を中心とした子どもの地域活動について発表されました。高等学校と小学校，都市部と地方，教員と地域住民という全く違う立場からのお話でしたが，共通することは，子どもたちのために熱心に活動されているということと，その活動をどう継続していくかが難しく，学校と地域との連携が大切だということが分かりました。

グループセッションでは，学校，公民館，行政関係者やＰＴＡ，学生など様々な立場の参加者８０人ほどが１４のグループに分かれて，実践報告を聞きあい，感想や意見を述べあいました。私の参加したグループでは，公民館の方が，半年ほど前から始めた「公民館クラブ」活動の様子や苦労した点について報告されました。小学校のクラブ活動に地域住民の方を講師に招き，得意分野を子どもたちに教えていただくという企画は，子ども・学校・公民館・地域が一つにつながり，とても魅力的だと思いました。見守り隊や読み聞かせの活動も広がっていますが，地域の方が先生として学校で子どもたちと交流することで，地域と学校の距離が近づき，また公民館が関わることで子どもたちが公民館に遊びに来るようになったそうです。学校と地域とのコーディネートや活動を継続させることの難しさなどについてグループ内からも意見が出され，とても参考になりました。また，福井大学教育地域科学部の学生による「もぐもぐブロック活動」報告では，小学校３年生から高校２年生までの２３人と料理を通して学びを展開している活動が紹介されました。地域も学年も経験も違う子どもたちの仲をいかに深めるか，一人一人の役割を意識して調理できるか等を目標に活動してきました。子どもたちが初期のころと比べ大きく成長した姿や楽しそうな笑顔を見ることができ，スタッフも共に学び，成長できたことを誇りに思っているそうです。グループからは，地元の伝統料理を伝承する活動をしている地域があるので，公民館等を通じて紹介してもらうといいのでは，という意見がありました。今回のグループセッションが，子どもたちと学校のつながりを地域へと広げるきっかけになることを期待したいです。

国高小学校ＰＴＡでは，本年度「国高っ子の夏祭り」を初めて開催しました。ＰＴＡを中心としたゲームコーナー，自治振興会の昔遊びコーナー，スポーツ少年団の体験コーナー，仁愛大学のよさこい，地元企業による働く車コーナーと飲食コーナー，巨大スクリーンでの映画鑑賞に１，０００人を超える人たちが集まりました。祭りというイベントを通して，共感と協力の輪が広がり，学校と地域がより深くつながることができました。大切なのは，このつながりを継続することだと思います。シンポジストの方も活動を５年は続けなければ，成果は出ないと話されていました。子どもたちの成長を願ってつながったこの活動をこれからも広げていきたいと，思いを新たにしました。

ラウンドテーブルに参加して

越前市PTA連合会　土谷 良恵

今回初めてラウンドテーブルに参加させて頂きました。ラウンドテーブルという言葉も知らない私が参加してもいいものかと思いましたが，とても楽しく，また有意義な時間を過ごせ，嬉しく思っています。

テーマは，地域と学校ということで身近な話題だったため，いろんな事を考え気づかされる点もありました。ポスターセッションという聞きなれない言葉で戸惑ってしまいましたが，様々なポスターの前で多くの方がプレゼンをはじめたので，あちこちで見聞きするという体験もできました。確かにポスターが展示されているだけでは，あまり気にも留めず内容も入ってこないので，素通りしてしまったかも知れません。でも集客数が多かったり，一生懸命プレゼンしている姿を見ると，ついつい足を止め聞き入ってしまうものですね。

シンポジウムでは２例紹介があり，市立札幌大通高校の平野氏による学校での取り組みと福井県の安居の里を守る会の重森氏による取り組みの講演でした。高校生が様々なチャレンジを地域の方々の手助けのもと中長期的に行っているようです。限られた高校生活の中での事業となると困難も多く，今も模索中なのを感じました。安居地区では，子どもたち主体でバックアップは大人がという体制で子どもの案のビオトープを作りホタルやミズアオイを育て，子どものうちから自然と共存するという素晴らしい体験をし，愛郷の心を育てているのだと知りました。とても熱く語って下さったので和やかなムードになり，そのあとのグループディスカッションが気負わずにすみ，助かりました。

私たちのグループでは福井市清明公民館主事の泉さんの体験談のもと話し合いが進みました。他県の方も交えたグループだったので，福井県の人と人との距離感が近いことを改めて認識しました。当たり前だと思っていたことが，福井県だからこそ出来ている事だと知るいい機会でした。私の住んでいる地域でも，

自治振興事業として様々な取り組みがあり，地域と学校との強いつながりを感じる事ができます。何年も継続しつづけることにより，より深い結びつきが生まれるように思います。今の時代だからこそ人との繋がりを大切にしたいです。

今回ラウンドテーブルに参加するきっかけを下さった冨永さん，本当にありがとうございました。

今求められる資質・能力をどう子どもたちに落とし込んでいくか

富士市立高等学校 教諭　遠藤 健

「富士市立高校で過ごした生徒は，どのような変化を感じられますか？」ラウンドテーブルで度々聞かれる質問である。ありたい姿を頭から離したことがない日々，生徒が活動を振り返ると同時に教師自体の活動を振り返ることの繰り返しで，生徒と教師の変化を測るものさしの精度が上がっているように感じられる。意図的に機会を与え自分たちが考えたことで実践していくことの繰り返しで，気が付いたら生徒は大人を超え始め自主運営をしたがるようになる。それこそが一番感じる変化ではないだろうか。

全国では学校改革が始まり，授業・教員組織・地域・異校種連携，様々な場所で特徴ある取り組みが行われている。そんな情報をここ福井大学で得ることができる。ただ情報を得るだけではなくて，意見を交換し建設的な思考を持たせてくれる。１番は，事例報告をさせていただきながら問いを受け考えることで，客観的な振り返りができ，広い視野でやるべきことが湧き出てくる。ここに来るときの覚悟として，「湧き出てきたものを，どのように今求められている資質・能力として子どもたちに落とし込んでいくか。」を発見し，すぐに実践していくか。具体的に動き出さなくては何の意味もないと自分に言い聞かせている。富士市立高校では，総合的な学習の時間の中で落とし込むフレーム持っているため，このきっかけを最大限に生かさずにはいられない。落とし込むとは教えこむことではなく，子どもたちの深い思考に社会の思いを意図的に届かせること。環境と時間をうまくコントロールし気付くきっかけを与えること。簡単そうで１６歳・１７歳・１８歳向けの仕掛けは綿密な準備が必要となる。逆に目的と準備さえ固まれば当日は子どもたちの動きを観察しながら，流れが止まらないようにその場その場で柔軟に対応していくだけでいいだろう。一人で教育活動をしているわけではないから，仲間を納得させるだけの要素を持ちながら目的を共有することがとても重要となる。

問いは「本物」でなければならないし実践と省察を繰り返し，達成感を数珠つなぎしていかないと面白くない。そのために，実社会から切り離すことはできない。１日目の Zone C:「コミュニティ地域と学校はいかに学び合うのか」では，福井県の公民館の多さとその取り組みに驚かされた。そのなかで，まだまだ学校教育は閉鎖的だと気付かされた。また，原点がここにあると感じた。富士市立高校では，まちづくりセンターと連携し授業で繋がりを得ることができた。なんのために学ぶのか。学校では学び方の手段を学び，知識を活用しながら目標を見つけるのは地域社会しか

ないと再確認することができた。そう考えると学校は地域社会ともっともっと密接な関係にないと子どもたちは学ぶ機会を持てない。フィールドワークは，最初にきっかけを与えたあとは子どもたちの自主性に任せている。あえてフリーな状況にしておくことで本物が生まれ持続性が高まるのではないか。教員の見守る姿勢と獲得物を見極める力で，気付いたら今求められる資質・能力が落とし込まれていた。これが理想と考える。そのために，質の高いオーガナイズを用意する必要がある。まずは教員がオープンマインドでコミュニティの輪を広げていかなくてはならない。組織内でもめている暇はない。「様々な壁を超えて重なりの輪を増やしていこう。」そう今は考えている。

最後に，伝達作業はいつでもできる。広島創生イノベーションスクールから頂いた資料，「生徒の皆さん身に付けてもらいたい資質・能力」のなかから，１．新たな価値を生み出すことができる人の知識に対する考え方　２．世の中の諸問題について理解し，取り組むべき課題を設定する力　３．目標を共有し，その達成に向けて他者と協働する力　４．自分の意見や考えを見える化し改善する力　５．自らの成長のために，学びや体験を振り返り次に活かす力　６．目標達成に向けて自律的に行動する力　７．困難や失敗に直面してもあきらめず，前に進む力　８．多様な価値観があることを理解し，より良い人間関係を構築する力。このような資質・能力を落とし込む戦略を立て実行していく。原点と現時点を行ったり来たりしながらこれからも学校全体，まち全体でやっていきたい。

Zone C2 に参加して

早稲田大学 4 年生　森本 真衣

福井大学のラウンドテーブルに参加したのは 2 度目であった。私自身あと数か月で社会人を迎える。教育学を大学で学んではいるが教師という職に就くことはなく，さらに公務員でもなく，一般企業に就職する。しかし，教育という分野はどこで，どのような生き方を選ぼうとも，人が育つという点で離れられない重要なものであると考えている。そのため教育の分野を将来選ばないにしても，このラウンドテーブルに参加している。

今回私は Zone C コミュニティの C2「地域と学校はいかに学び合うのかー大人も子どもも育ち合うコミュニティへー」に参加した。ここで一点このタイトルについて，言葉の選び方で感銘を受けた。「育ち合う」という言葉だ。この言葉が出るのは今の教育現場では当たり前なのかもしれない。しかし，私が高校生のときに私の母校ではその言葉は出ることはなかったと思う。「教育」は良くも悪くも，皆平等に自分の考えを述べられるワードであると感じる。だからこそ言葉の一つ一つが与える情報には，繊細に慎重に，かつ適切でありたいものである。その点で「育ち合う」という言葉は，このラウンドテーブルの趣旨を良く表した言葉で，このラウンドテーブルに参加し終えた後に実感と共にこのタイトルに納得を覚えるものであったと感じる。

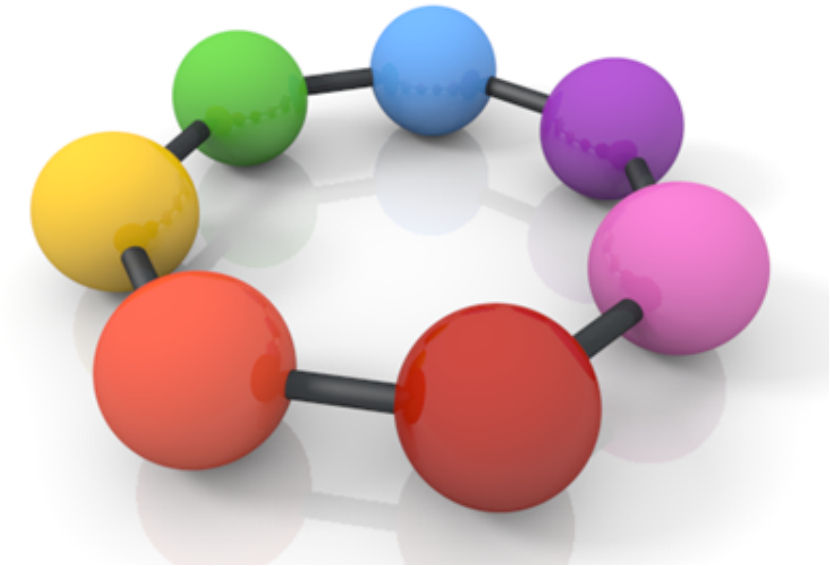
この「育ち合う」という考えは，Session Ⅱの安居の里を守る会の重森さんのお話の中でも感じ取れた。「子どもを一人の大人として

扱う」という言葉からだ。この言葉からは，皆対等に発言し，他者から学び，世代も性別も肩書きも様々な多様な人の中で，自身を育てていく，また，そういった人が増えていくというイメージを受けた。

また，市立札幌大通高等学校の平野先生のお話からは，多様なコミュニティが相互に刺激し合い，新たな可能性が生まれる予感を感じさせられた。どこか一つの組織が何か困りごとを抱えていたとしても，それを助ける手立てはその組織内ではなく，外部にあるかもしれない，そんな期待が持てるお話だった。これからはどこでもそのような外部との連携が求められるようになると思う。その中でも，私にとっては学校という場所が連携を求めることが嬉しかった。学校には閉鎖的なイメージを持っていた，さらに言えばまだそのイメージそのままの教育現場も多くあるのではないかと推察するからだ。お話を聞いて民間の企業に入ろうとしている私にも何かやれることがあるのではないかと感じられた。

この SessionⅡにおいて私が感銘を受けたのは今までに記したことだけではない。SessionⅡが参加者にとって有意義な場であったのはコーディネーターの富永先生のお力が大きかったと感じる。参加者たちの空気を読みながら，うまく話を引き出しながら，表情を見ながら話が出てきそうな人を選んで，参加者を組み取ってくださった。それが当たり前かのようにふるまう姿に，富永先生個人と福井大学に感銘を受けた。

最後になったが，今回のラウンドテーブルに参加できたことを大変うれしく感じている。この場を作ってくださった方々に心から感謝し，終わりとさせていただく。



Zone D 授業研究

教師の資本を授業研究によっていかに培うのか

子どもと教師の学びを支えるために

福井大学教職大学院 准教授　宮下 哲

Zone D では，「専門職の資本」という考え方を提案させていただき，上記のテーマで各 Session を進めた。

Session Ⅰ では，福井県内外の小中学校や高等学校や教科研究会から報告をいただいた。

Session Ⅱ では福井市至民中学校の竹林教諭，福井市中学校社会科研究委員会の森上氏・松原氏，他県から福井県に派遣されている船田氏，牧野氏，藤野氏から，福井県の学校や教科研究会でどのような授業研究が行われ，どのように学校文化や教員文化が養われているのかの報告がされた。それぞれの取組について東京大学大学院の秋田教授からコメントをいただいた。

秋田教授のコメントに含まれた課題提起を受けて，続けて Session Ⅲ が行われた。富山，福井，長野の小中学校からの具体的な事例を元に学校における授業研究の多様性に学びあったり，大学と学校の連携，在籍校が異なる教員の協働による授業研究の意味を検討したり，福井，埼玉の高等学校からの事例を元に，高校における授業研究の発展と可能性について議論を行った。教師が生涯にわたって意欲を高めて成長し続けたり，子どもたちの学びと成長を支えたりするための資本が，授業研究によっていかに培われているのかを，緩やかに共有することができた 1 日だった。

つながり，ひろがり，そして…

福井市至民中学校 教諭　竹林 史恵

きっかけ

本校の授業研究について話をしないか，と打診されたのが晩秋の頃。福井大学教職大学院の拠点校で研究主任を務めている以上「NO」はない。「私個人の発表じゃない。本校の良さ，他にはない特徴を全国に伝える絶好のチャンス！」とプラスに捉えて臨むことにした。数年分の研究紀要や実践録を引っ張り出し，今年度の実践録の原稿や参観記録をじっくりと読み返し，合計数百ページにも及ぶ

冊子の数々を前に，改めて本校の「書く文化」を感じた。むろん書くことが最終目的ではない。授業力をつける，自己の力量をアップする，そのための一手段である。しかし，授業を参観して，１年間を振り返って，その都度深い考察を繰り返した文章からは書き手の思いがビンビン伝わってくる。本校内外の執筆者，延べ数百名の思いが詰まっている冊子を様々な形で遺し続けている本校の研究の意義を，この機会に他校の，他県の様々な立場の方に知っていただけたら，と改めて思った。

何度も手直しした原稿や不慣れなプレゼンは研究部メンバーのおかげでどうやら形になった。発表前，多くの方から温かい言葉を頂いた。当日の出来は自分ではわかるはずもないが，発表直後，会場で見守ってくれていた仲間達のとびきりの笑顔を見て，「伝わったんだな」とホッとしたことはよく覚えている。

京都から

今回初めて，研究会やゼミで知り合った京都在住の先生方にも声を掛けた。私立高校で研究主任として活躍中のＹ先生は「今の悩みを話すつもりで…」と言いながら，長年の経験を活かした丁寧な取組を発表してくださった。「こんなに実のある２日間は初めて！」と満足げに帰京された翌朝，真っ先に校長室に直行し，研究部としてやりたいことを熱く語られたそうである。Ｙ先生の積極性に感心するとともに，県や校種の垣根を越えて初対面同士が率直に語り合えるラウンドテーブルの醍醐味を，初参加の先生にも感じてもらえたことが非常に嬉しかった。余談になるが，福井自慢の料理を味わいつつ教育談義に花を咲かせた夜の会も忘れがたい思い出である。

涙の理由

多くの気付きや感動をもらった中で，最も「心が揺さぶられた体験」は授業研究フォーラムの最後，富山大学松本教授のお話だった。富山県堀川小，福井大学附属中の素晴らしい発表の後である。「（前略）私も堀川小へ転勤になった１年目，とても忙しくて大変だった。でも１年勤務してわかったこと，それは堀川の先生達は『教科』を教えているんじゃない，『教科』を手段にして『教育』をしているんだと。だから楽しい。堀川や附属の先生達も大変なのに，発表が楽しそうだったでしょ？でも一人ではできない。みんなでだからできる。（中略）点数を上げることだけにこだわるのではなく，もっと奥深い，子供の心に根付くことをやらせてもらえる教師に堀川がしてくれた。そういう教師になれてよかった，と今思っている…。」この話を聴きながら不覚にも涙が。うわ，どうしよう，こんな場所で。でも止まらなかった。『学校の先生になりたい』と思っていた子供時代からの気持ちを，ズバリ表現してくださった，まさにそんな言葉だったからである。心に響くあったかいお言葉…きっと忘れない。

体験から

院生時代から数回参加しているラウンドテーブルだが，今回ほど印象深い，充実した経験は初めてである。それは，発表をきっかけに課題に対して自ら主体的に考え，仲間の力を借りて何度も練り直し，さらに発表に対して様々な評価を頂いたおかげである。また，立場の違う方々との交流を通して，自分（達）の実践を新たな視点，違った角度で見つめ直し，大切な点を再確認できたからである。

思えば，これは生徒にとっての「授業」と同じではなかろうか。主体的，意欲，評価など日頃から授業づくりの時に意識しているキーワードは，今回の自分の体験の中でも，やはりキーとなる部分であった。その体験を仲間と共有できれば，その重みや意義はさらに何倍，何十倍にもなる。今回は本校の生徒，教員，サポート至民さんなど，本校に関わる２０名以上が参加させていただいた。参加前，

会場で，参加後，それぞれに声を掛け合い，感想を伝え合い，ねぎらい合ったことの一つ一つが大切な財産である。そして，今回参加して得た，それぞれの手応え（＝宝）を今後に活かし，新たな至民中学校の可能性を探ることが，次への成長につながるものと確信している。

出会いと学び

奈良県生駒市立光明中学校 教諭　篠原 嶺

授業中，下を向き疲れきった生徒を見て，このままではまずいと気付く。どうすれば，生徒の顔が上がるのかと考える。しかし，具体的な手立てが浮かばない。いやな汗が流れ出す。授業を終えて職員室に戻り，深いため息をつく。教師になって３年目の私は，このような場面が何度もあった。

まれに生徒と一体になったように感じ，生徒から「もう授業終わりか！」「今日は早く感じたな」と言われる授業がある。そんな時は上手くいったと充実した気持ちになる。どうすれば，授業が上手になるのか。生徒が面白く楽しく学べる授業を創るためには，なにが必要なのか。教師として，どのようなことを学ばなければいけないのか。福井大学へと向かった。

１日目の Zone D で，特に惹かれたのは福井市至民中学校　竹林史惠先生の発表だった。至民中学校の取り組みを一言であらわすと「言語化」である。至民中学校では参観記録を書き，授業研究をされている。書くときの観点を示し，それぞれの教師が参観記録を書く。しかし，同じ観点で記録をとっているにもかかわらず，「一人の生徒に着目して書いたもの」「自分の授業に照らし合わせて書いたもの」「提案授業から，自分の課題を見つけて書いたもの」など書き方は多様である。おそらく記録者自身の問題意識が，あらわれているのではないだろうか。書くことで参観者は，自分の問題意識に気付き（あるいは明確化し），自身の授業と向き合っていく。一方で授業者は多くの参観記録を読むことで，省察の目が養われ，授業の見方が変わってくる。なにより，同僚とともに学ぶことで意識が高まり，励みになる。

このような授業研究を行っている至民中学校では，普段の実践などについて同僚と語りやすい雰囲気があるのだろう。いや，そういった知的な学校文化を創ってこられたのだろう。こんなことを考えていると竹林先生が驚きの一言を放った。

「至民中学校では学校全体で実践記録を書いています。」

掲げられた冊子は分厚く，300 ページは超えているだろう。シンポジウムが終わると，竹林先生に話しかけた。

「実践記録を読ませて下さい。」

「教室を出たところにあるので，よければ持って帰って下さい。」

福井県内の先生方と少し話してから教室を出た。冊子を貰おうとすると，なんと残っていなかった。肩を落としていると竹林先生が声をかけてくださり，訳を話した。

「先生のところへ冊子を送ります。」

なんと優しい人なのか。お礼を述べ，その場を後にした。

２日目のラウンドテーブルが始まった。同じテーブルには至民中学校　鈴木三千弥先生がおられた。ラウンドテーブルのメンバーを組んで下さった福井大学の方に感謝した。初対面であったが，

至民中学校の発表を聞いた感想，実践記録の到着を楽しみにしていることを伝えた。

昼の休憩が終わる頃，鈴木先生が少し照れたような様子で話しだされた。

「家にある実践記録を持ってきてもらったので，荷物にならなければどうぞ。」

まさにシンポジウムで紹介されていたものである。初対面の人に，ここまで丁寧に優しくしてくださる鈴木先生に感動するとともに，至民中学校の教師が持つ同僚への温かさにふれた気がした。

午後は私が報告した。国語の授業で取り組んだことを話したが，まったく上手く話せなかった。相手にちゃんと伝わっているのか。この取り組みに意味はないのではないか。話している最中に不安が広がり，いやな汗をかいていた。一通りの報告を終えて，こんな報告で話し合いになるのかとうつむいていた。するとテーブルのメンバーが子どもたちの持つ言葉・表現力，学習意欲を引き出すことなどについてのそれぞれの実践と照らし合わせながら語り合った。

福井大学を後にし，家へ帰ってきてから至民中学校の実践記録を読んだ。すると，無性に書きたくなった。国語科・図書館教育・教育相談・部活動など，テーマは多様である。しかし，これらの根底で共通していることがある。それは普段から悩み，不安に感じていることである。言語化することで，その悩みや不安が形になり，自身の見方・考え方が見えてくる。見えることで，取り組み方が変わってくる。このような過程を経て，教師として成長していくのではないだろうか。

おそらく次の福井ラウンドテーブルにも参加するだろう。今度は，私自身の実践記録を携えて。

ラウンドテーブルに参加して

福井大学教育学部附属特別支援学校　教諭　　大坂 真喜子

ラウンドテーブルへの参加は昨年に続いて2回目です。ポスター発表では日本全国各地のお国言葉があちらこちらから聞こえてきます。「福井大学すごい，こんな大きな大会，すばらしい」と言う会話を耳にしたときには，福井大学出身の私はとてもうれしくなりました。

Zone D では，「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマで報告と討議がありました。

SessionⅡでの福井市至民中学校と福井市中学校の社会科授業研究委員会の報告は，授業を分析し，研究を重ねて究極の授業を創りあげようと努力を重ねていることが伝わってきました。私も日々の自分の授業を振り返り次の授業に生かせるように努力をしたいと反省しました。やっぱり授業は教師の命ですね。県外からの派遣教員の方々の発表では，福井県の教育レベルの高さがよく分かりました。私の後ろの席の方が，「やっぱり福井はすごい…」などの会話をしていて，思わず自慢したい気持ちになりました。どの発表も，もっと詳しく聞きたかったのですが，質問などをする時間がなく，話を深めることができなかったのがとても残念でした。

SessionⅢでは，福井ブロック授業研究会の報告がありました。日頃の授業についての悩みや課題などを共有し，話し合い，実践して前向きに授業に取り組んでいて，福井地区の英語教員全員が協働・連携して福井地区の生徒を育てているそうです。福井地区の生徒は

このような英語の授業が受けられてとてもラッキーです。さすが，学力№１です。

２つめの報告は，福井大学美術科の大学院生と福井大学附属特別支援学校の協働実践研究プロジェクト「鑑賞学習開発『特別支援学校での壁画制作実践報告』」でした。鑑賞学習開発とは，「つくることに（表現）」に偏らずに「みること（鑑賞）」も大切にしてお互いを関連づけながら授業を構成していく取組です。院生２人は附属特別支援学校で教育実習をした経験から，スムーズに事前調査を進めることができ，支援計画や活動内容を中学部教員と協働・連携しながら練り上げていきました。完成した壁画は校門横の壁に恒久展示することに決まりました。今回の発表のなかで，私の担任する中３年，Ａさん(女子)の事例がありました。Ａさんは，壁画制作の活動に回を重ねる毎に楽しそうに参加するようになりました。手先の細かい操作が苦手で空間認知力の弱い彼女がどうしてこの活動が好きなのかを知りたくて，毎回授業の様子を観察していました。私が考えるよい授業とは，以下のとおりです。

①何をしたらよいのかがすぐに分かる授業（説明は少なく，視覚支援を含めた環境作り）

②主体的に取り組める授業（準備から片付けまで見通しを持って取り組める）

③自分の活動の軌跡を自分で確認できる授業（自己評価でき，達成感が持てる）

今回の壁画制作はまさにそのような授業でした。完璧な授業はなかなかできないと思いますが，見ている者が参加したくなる授業は，教室に入った瞬間に分かるものです。それは言葉では伝えにくいのですが，私も一緒に壁画制作がしたくなりました。さらに，院生が毎回授業を省察し，一人一人に適切な環境を設定してくれました。何よりも教室に入った瞬間に制作する気持ちにさせてくれるのです。生徒の個性と学生さんの個性がしっかり組み合わさり自然な流れの中でのびのびと活動していました。

附属特別支援学校ではいつも生徒がのびのびと授業に参加しています。畑で育てた野菜を使ってピザ窯でピザを焼いたり，越前の土を使った焼き物をしたり，さをり織りをしたり，どの生徒も主体的に見通しを持って活動に参加し，達成感を持つようにしています。このようにして自信を付け自己有用感が持てるように授業研究をしています。附属特別支援学校の研究大会や見学にもぜひお越しください。お持ちしております。

報道ファイル

福井新聞より

2016 年 3 月 13 日

学校の枠超え 良い授業模索

福井市社研 若手議論、力量アップ

本県教員 自主研究が活発

本県の小中学生の高い学力を支える要因の一つに、教員同士による「授業研究」がある。校内のみならず、学校の枠を超え、子どもたちにとって「より良い授業」を模索する取り組みに、県内外から注目が集まっている。（宇野和宏）

1月、福井市奥山中の2年の社会で、幕末・明治期に活躍した福井藩士、由利公正を題材にした授業が行われた。

「明治維新によって、由利公正の目指した日本は実現したかな？」と問いかける中山貴寛教諭(25)。ある男子生徒は「学制で庶民の学力や判断力がついた。実現したと思う」。すると女子生徒が「年齢や国税納付額で選挙権は制限されていた。由利公正が目指した政治じゃない」と反論。議論は熱を帯びた。

授業は、福井市中学校社会科授業研究委員会（市社研）の提案（公開）授業として行われた。市社研は1990年に発足した、主に福井市内の社会科教員でつくる勉強会で、本年度は71人が参加。歴史、地理、公民の各部会ごとに毎年、提案授業を行っている。教員による自主的な勉強会としては県内で先駆的存在だ。

■学習課題練り直し

歴史部会は提案授業に向け、昨年10月以降、計7回の「指導案検討会」を重ねた。「生徒の話し合いが深まるにはどうすればいいだろう」「この資料を使うと生徒たちに分かりやすいのでは」。授業や部活を終えた午後6時ごろに教員が集まり、毎回2～3時間、激論を交わした。

今回、授業者として立候補した中山教諭は当初「明治維新」を学ぶ単元（全9時間）の1時間目で由利公正を題材にし、由利はどのような日本を目指したのか」という学習課題を考えた。ところが、検討会の中で先輩教員たちから「単元全体の集大成として由利を学習しては」といった指摘が出て、最終的には1時間目から9時間目に変更、学習課題や学習活動を大幅に練り直した。

中山教諭は採用1年目で、美山中には社会科教員は一人だけ。授業後「専門的知識や指導法を先輩方から学べて勉強になった。生徒同士の活発な意見のやりとりがあり、良かった」と振り返った。市社研の歴史部会長を務める柳生敏明・大東中教諭(38)は「若手教員の自由な発想や熱い思いを尊重し、みんなで工夫して授業を考えるのが市社研の良さ」と強調する。

■助け合うコミュニティー

こうした取り組みは、2月下旬に開かれた福井大教職大学院の「実践研究福井ラウンドテーブル」で、県中学校教育研究会福井ブロック社会科部会長代理の森上愛一郎・至民中教頭(56)、市社研委員長の松原義之・明道中教諭(46)らが報告。県内外から参加した約200人の教育関係者が耳を傾けた。

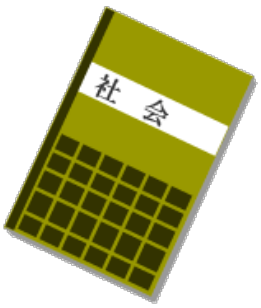
発表を聞いた同志社中（京都）の井口和之教諭(45)は「京都でも同様の教員集団はあるが、政治色、組合色が強く、若手教員は距離を置きがち。福井のように若手のスキルアップにつなげている事例は参考になる」と話した。

県外から本県に派遣されている教員にも学校の枠を超えた授業研究は新鮮なようだ。福井ラウンドテーブルで「見えてきた福井らしさ」と題して報告した県義務教育課の船田次郎主任(47)＝鳥取県から派遣＝は「教員個人にお任せでなく、助け合うコミュニティーの存在が教員の力量形成につながっている」と、福井の強みを分析した。

福井大教職大学院の木村優准教授(38)は、市社研の授業や検討会を見た経験から「先生方が楽しんで授業研究しており、忙しいその中でも授業への活力につなげている印象。市社研のような組織が福井の教育の魅力の一つでは」と述べた。

他校の教員と練り上げた指導案で由利公正の授業を行う中山教諭（中央）＝1月、福井市奥山中

授業研究の取り組みを発表する福井市社研の松原委員長（左）ら＝2月、福井市の福井大文京キャンパス



Session Ⅳ

Round Table Cross Sessions

実践研究　福井ラウンドテーブル 2016　Spring Sessions

実践し省察するコミュニティ　に参加して

東京大学教育学部附属中等教育学校　教諭　　野﨑　雅秀

天候にも恵まれた今回のラウンドテーブルに参加させていただき，大変嬉しく思う。

１　symposium　「子どもと教師の学びを支える福井の授業研究」

私は，Zone D 授業に参加した。シンポジウムでは，福井市至民中学校の研究主任の竹林史惠先生の報告を聞いた。授業研究をとても熱心に行っていることに感銘した。授業研究とは「専門職としての教師の学び，力量形成の最高の学び合い」という発言にあるように，子どもたちの「学び」の質を高め，深めていくために，日々の教員集団の不断のたえまない，研鑽が必要であることを改めて思い知らされた。

また，福井市中学校社会科授業研究委員会の報告も聞いた。平成元（1989）年に 2 人の社会科教員の雑談から始まった研究委員会は，現在 28 年目（委員会は 187 回を実施）を向かえ，福井市内の 24 校の社会科教員 70 名が参加する組織として，積極的な活動を行っている。地元の出身「由利公正」の目指した日本は実現したのかという課題設定にいたるまでに何度も検討会を重ね合わせたという。福井の教育の熱心さを肌で感じることができた。

コーディネーターの福井大学の木村優先生は，配付レジュメのなかで，「授業研究の中で教師は同僚から未経験の状況判断の仕方を学ぶことができ，同僚の実践に触発されて新しい実践への挑戦を喚起することができる。そして，教師は同僚の実践から自らの実践を照射し，実践の省察を促進することが可能となる」と述べている。身近かに一流の教師は必ずいる。それに気づくかどうか。まさに，今という時間を偶然にも共有している「同僚」から，多くを学ぶことができるかは本人の心の持ちよう次第であろう。

私は，この福井にくる直前に同僚の実践を見てきた。とても刺激をうけた。その刺激を私自身の解釈と方法によって，4 月からの実践に生かしていきたいと考えている。

２　forum Ｃ　高校における授業研究の発展

（１）福井県立若狭高等学校の中村和浩先生と水谷友梨先生の報告「授業力向上に向けた若狭高校の取り組み」を聞いた。若狭高校は伝統校である。近年 20 代の教員が 25 名，実に全教員の 3 人に 1 人が 20 代という若い教員が多い。そこで，「若手教員授業力向上塾」が組織された。20 代の教員 4～5 名にベテラン教員が加わるグループが編成され，①師範授業の参観，②ふり返りの会，③塾生の授業の参観，④参観者が「ラブレター」を記入し授業者へという一連の流れがある。この報告を聞いて，若狭高校の「同僚性」の深さを知った。授業者をリスペクトして，参加者全員がヒントを得て帰るという。若手教員は「自分も真似したい」と思い，「お褒めの言葉とア

ドバイス」をもらい，自信をつけていく。とても素晴らしい取り組みだと感じた。現在はアクティブラーニングも導入しながら,新たな授業デザインを創造している。今後の成果をまた後日伺いたいと思った。

（２）埼玉県立新座高等学校の吉田友樹先生の報告「埼玉県立新座高等学校の授業検討会」を聞いた。新座高校は昭和 48 年創設の普通科の学校である。授業検討会は 2007 年から始まり，現在は再構築期に位置づけられている。年に 7 回の授業公開を行い，ねらいは，教師が互いに学び合う職場づくりと，全ての生徒が参加できる授業をつくるためである。適宜，実際の授業風景がモニターに写された。生徒が学び合う様子がうかがえた。授業研究会のグループ協議の記録用紙をみると，個々の生徒をじつに細かく観察しているかがわかった。さらに，授業研究会ニュースにも，教師と生徒の関わりの様子が丁寧に書かれており，生徒をここまで見ているのだと感じた。こうした，教師の生徒一人一人に対する暖かいまなざしは，きっと生徒に伝わっているのだろう。新座高校の生徒は教室に「安心感」をもって存在できる。

３　round table cross sessions

最終日, 5 人グループで実践の展開を聴き合った。これは私にとって全く初めての経験であった。

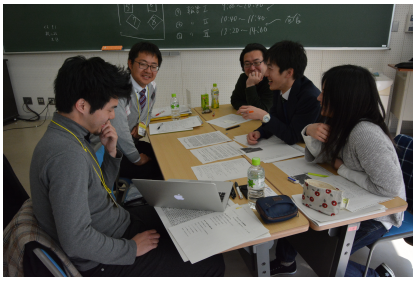
（１）関口健太先生（長野県岡谷市立岡谷東部中学校）の「SST 授業実践報告」を聴いた。岡谷東部中学校では，この活動を通して生徒たちに考えてほしいこととして，①自分のことだけでなく，周りの友達のことも考えて自分の行動を選択してほしい，②自分から行動を起こす大切さを考えてほしいという 2 点をあげる。信州大学教育学部の高橋史先生に指導を受けながら進めている。同僚のよき理解者を増やしながら，運営していく決意がうかがえた。

（２）つぎに，福井大学教職大学院の串尚哉さんの「授業実践報告」を聴いた。串さんは，ストレートマスターで現在も福井市内の小学校で授業実践を行っている熱心な学生である。日々の苦労とそれに対して積極的に進んでいく努力をまじかにうかがえた。ぜひ，よき教師になってもらいたい。

（３）最後に，私は「「元旦の社説」から考える授業」を報告した。朝日・毎日・読売の 3 紙のそれぞれの主張を読み, 生徒に「2016 年の日本のあり方」を考えさせた。文章を読み込み，文章を書く力は 6 年間の活動の中で育まれていくと改めて思った。

このグループに参加した福井大学の 2 年生加藤七海さんはご自身が学んできた福井の教育を熱く語ってくれた。ファシリテーターを務めて下さった福井大学の田中志敬先生が適宜質問やことばをつないでくれたために,大変スムーズな進行であった。グループの皆がこの参加を有意義に感じて終えることができた。参加者皆がこの参加を有意義に感じで終えることができた。

企画・運営されたラウンドテーブル実行委員会の皆様に感謝申し上げます。本当に，ありがとうございました。



実践の長い道行を語り　展開を支える営みを聞き取る

～8：20～14：00　一人の持ち時間 100 分～

広島県教育委員会　指導主事　　林　史

初めて参加させていただいた私は一人の持ち時間の長さに驚愕していた。4 人で５時間 40 分をどう過ごすのか。しかし，いったん始まってみると，その心配は杞憂に終わった。最初の発表は信州大学教育学部附属松本小学校の宮下先生。自らの実践を赤裸々に語り，想いを包み隠すことなく開示された。最初からオープンマインドなところにまた驚いた。先生の実践を聞いていると，日々の生徒の顔が見えてくる。質問したいことが次から次へと出てくる。「そうなんだよね～。」共感する場面が数多くあった。次の日（3 月 1 日）が道徳の研究授業の予定であるが，宮下先生は子供がどんな問を発してくるのかが大体わかっている。誰がどこにひっかかり，どのような問を出してくるか，そしてそれはどのようなバックグラウンドから出てくるのか。日頃から子どもに寄り添う姿勢から学ぶべきことが多くあった。

2 人目の報告は明治大学の大学1年生理工学部の本橋さん。「登戸探求プロジェクトに参加して」という報告。明治大学で行われている登戸探求プロジェクトは，小学生と大学生が一緒に，１年間をかけて「何か」に取り組む授業。本橋さんの実践からもまた子供の様子が目に浮かんでくる。

実際にプロジェクトを小学生と一緒に行うことで「気づく」こと。そこから「主体的な学び」が生まれている。本橋さんは，このようなラウンドテーブルに参加し，様々な大人たちと話をすることが楽しいという。多様性の価値に気づき，殻に閉じこもることのない若者である。

3 人目の報告者は，福井市美山中学校佐々木庸介先生。中学校で理科を教えており，特別支援教育の専門家でもあり，すべての子供が学びやすい環境づくり（ユニバーサルデザイン）に尽力されていた。総合学習への取組も素晴らしく，これまで様々な柱が乱列していた総合学習を一本の柱とし，学習のプロセスを重視した深い継続した意味のある学びへと変革していた。これは今，広島県が進めていると取組とも重なっており，非常に感銘を受けた。先生の報告で何度も出てくるのが，「子どもの学びのみとり」という言葉だ。子ども一人ひとりを見つめる。そこからすべてが始まる。

このラウンドテーブルで，「自己の取組を話し，聞くことでこんなにも学べるのか」というのが正直な感想である。このような研修をぜひ広島県でも取り組んでみたいと思うことができた。

実践し省察するコミュニティ

実践研究　福井ラウンドテーブル

2016　summer sessions

福井大学総合研究棟 V（教育系 1 号館）・共用講義棟　／　AOSSA　（予定）

６／２４　Fri.　17:30-18:40

６／２５　Sat.　12:40-17:40

Session 0 ポスターセッション　10:00-11:20　Students' Poster Session

子どもたちが語る「私たちの学校・学び・未来」

これから，21 世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生が今，この時の教育の中で何を学び，いかに学び，そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを，「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

会場　福井大学文京キャンパス総合教育棟Ｖ（教育系１号館）２Ｆロビー
参加校　募集中

発表申込方法　平成２８年６月１１日（土）までに dpdtfukui@yahoo.co.jp までに参加申込の旨，メール連絡ください。メール件名に「Students' Poster Session 報告エントリー希望」とお書きいただき，本文に氏名（ふりがな）・所属・役職を御記入ください。

参加費　無料

Zone A 学校　子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

― チームで「育ち」を支える ―

教師集団がコミュニティとなって協働することの重要性は，「チーム学校」といった言葉に端的に見られるように，もはや周知のものとなっています。コミュニティやチーム，あるいは協働の重要性が認識されるようになってきたのは，取りも直さず，大きく変動する 21 世紀の社会を生きる子どもたちに，私たちのこれまでの価値観や経験をそのまま教えられないことが明確になってきたからです。そのような教育を求められる今の学校現場では，教師一人の力で全てに対応することに限界があります。だからこそ，私たちは他者とチームになることによって可能性を拓いてきました。これまで「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと Zone A が積み重ねてきたセッションでも，そのことが繰り返し確認されてきました。

協働的な実践を積み重ねてきた方々であれば，チームで取り組むことの確かな有効性や実り豊かな可能性を実感しているのではないでしょうか。しかし，たとえチームを組織したとしても，その活動がこれまでの学校教育の枠組みを脱しないとするならば，これからの社会を生きる子どもたちに資するものにはならないかもしれません。一方で，しばしば理念ばかりが先行し，意義は分かるが多忙な現実の中で具体的にはどうすれば良いのかと抵抗感にも似た気持ちを抱いている方々が多いのも現実だと思います。

こうした問題意識のもと，私たちは今回，フラクタルな構造としての「育ち」というキーワードに着目することにしました。これからの社会を生きる子どもたちを支えるという視点から考えるならば，子どもたちの「育ち」だけではなく，そこには，私たち教師の，あるいは学校の，さらには地域や社会全体の，そしてチームそのものの「育ち」の問い直しもまた同時に浮かび上がってくるからです。そこで今回 Zone A では「チームで『育ち』を支える」というサブテーマを設定し，学校現場で実践をされている方々の発表や，参加者の皆様との語り合いを通して，チームでのアプローチについて具体的に考えていくことにしました。本セッションを通し，これからの学校教育全体に対する教師コミュニティの可能性について，皆さんと深め合うことができればと考えています。

Session 0　オリエンテーション　13:00-13:10
Session Ⅰ　ポスターセッション　13:10-14:10
Session Ⅱ　シンポジウム　14:20-15:50

シンポジスト

福井市啓蒙小学校長　川﨑 清美 氏
板橋区立赤塚第二中学校教諭　岡部 誠 氏
福島県立ふたば未来学園高等学校教諭　對馬 俊晴 氏

コーディネーター

福井大学教職大学院准教授（福井大学教育学部附属幼稚園教諭）　青木 美恵 氏

SessionⅢ　フォーラム　16:00-17:40

Zone B 教師教育　21 世紀の教師教育をイノベーションする

― 学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う ―
― これからの学部段階の教員養成を考える―

Zone B では，生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から，“２１世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

B1 学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う

現在，教育改革の大きな展開の中で，学校の組織文化を踏まえつつ，改革への長く広い展望を持ち，長期的な学校改革への広汎な協働を生み出し支えていく，新しいスクールリーダーシップが求められています。

このことを踏まえ，福井大学教職大学院では，今年度から管理職になることを前提に入学する「学校改革マネジメントコース」を立ち上げました。本学教職大学院の特徴である「学校拠点方式」により，学校ごとの抱えるマネジメント課題について，学校改革のヴィジョン，改革を進める組織づくり，改革に伴う危機管理に注意をむけつつ，改革期の組織マネジメントという課題を焦点とする，新しいコースです。

昨年１２月に中央教育審議会から出された答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について　～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」においても，教職大学院において，従来のミドルリーダーの養成とともに，教育委員会のニーズに合わせて，管理職候補者となる教員に対する学校マネジメントに係る学修の充実を図り，管理職コースを設置することや，教育委員会との連携による管理職研修を開発・実施することの必要性が謳われています。

そこで，今回の Zone B では，「学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う」と題し，これからの組織マネジメントの在り方やマネジメントリーダーに求められるもの，またその養成などについて，福井大学教職大学院の取り組み，教員養成系大学における教師教育改革とマネジメント，文部科学省の考える管理職コースの姿，報道関係者や企業経営者等から見るマネジメントと学校の課題などから，関係のシンポジスト４名で論議していただくとともに，引き続いて行われるフォーラムでは，少人数のグループで参会者の皆様方と共に論議していきたいと思います。

Session０　オリエンテーション　13:00-13:10
Session Ⅰ　ポスターセッション　13:10-14:10
Session Ⅱ　シンポジウム　14:20-15:50

シンポジスト
独立行政法人　国立高等専門学校機構監事・前兵庫教育大学学長　加治佐 哲也 氏
文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長　柳澤 好治 氏
企業関係者　（交渉中）
福井大学教職大学院教授　三田村 彰 氏
コーディネーター
福井大学教職大学院教授　松木 健一 氏

SessionⅢ　フォーラム　16:00-17:40
Session Ⅰ，Ⅱを受け，小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

B2 これからの学部段階の教員養成を考える －実践を聴き，夢を語る －

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ，とりわけ教職免許制度の改定が迫ってきています。しかし，長い蓄積の中で培われてきた組織の中で，新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践と経験を活かした，当事者としての知恵が問われてきていると思います。

今回，学部において教員養成に携わる当事者が，互いの取り組みを聴き合い，語り合う新しいセッションをひらいていくことになりました。大学における教員養成をどのように支え，また今後に向けて発展させていくのか。さまざまな背景と専門を持ち，学部での教員養成に携わっている当事者同士，現実の中での互いの取り組みを聴き合い，語り合う場を創っていきたいと思います。

初回となる今回は，少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを聴き合うことを中心に据えたいと思います。それぞれの取り組み，そこでの工夫，あるいは課題や悩みも含めて共有し学び合いながら，これからの学部における教員養成への夢を，当事者としてふくらませていくことができればと思います。

互いの現実とそこでの取り組みを聴き合うことを通して，また夢を語ることを通して，さまざまなキーワードがセッションの中で浮かび上がってくる。それを次回のセッションにつないでいきたいと思います。

Session０　オリエンテーション　13:00-13:10
Session Ⅰ　ポスターセッション　13:10-14:10
Session Ⅱ　シンポジウム　14:20-15:50

シンポジスト
　調整中
コーディネーター
　調整中

Session Ⅲ　フォーラム　16:00-17:40

Zone C コミュニティ　学び合うコミュニティを培う

― 持続可能なコミュニティをコーディネートする ―

これまで Zone C では，各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を，地域・世代・領域を超え共有し検討し続けています。そして，ここ数年はコミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て，互いの実践から学び合っています。現在，私たちが地域や職場で出会う課題はある一つのアプローチで解決しえないものへとより複雑化・高度化しています。そのため，地域の発展を支える自治や学習においてもその持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。この問題意識と視点を引き継ぎながら，Zone C は，前回の互いに重なり合う二つのテーマ C1「若者と地域」・C2「地域と学校」をさらに問い深めていきます。

人口減少・移動の更なる進行によって，地域社会の存立そのものが危ぶまれるとともに，「地方創生」が重点課題としてクローズ・アップされてきました。そのような中，C1 では，あらためて新しい世代の主体的な実践や地域活動に光をあてながら，その持続的な展開を支えるコーディネートの可能性と課題を考えていきたいと思います。

また，昨年 12 月には「学校と地域の連携・協働」にかかわる課題整理と今後の包括的な方向性を提起する中央教育審議会答申が出されましたが，子どもたちの学びや成長を支えることで学校と地域がともに学び合うという実践は，各地で着実に積み重ねられてきています。C2 では，そのような実践の長い歩みや新しい試みを交流し，その価値を互いにじっくりとふり返りながら，子どもも大人も育ち合うコミュニティのこれからを考えていきたいと思います。

C1 学び合うコミュニティを培う－若い世代と地域を結ぶ－（会場：AOSSA）

C1は，福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下，JR福井駅東口前のAOSSAが会場です。Session Ⅰ ではフロアをまたぐ空間的な拡がりのなかにポスターを配置し実践交流を行います。Session Ⅱ では，「持続可能なコミュニティをコーディネートする－若い世代と地域を結ぶ－」と題しシンポジウムを行います。若い世代が主体的に活動を進め地域に参画していることの意味を確認しながら，新しい世代の活動をどのように支えていけるのか，また，それをどのようにコーディネートしていけるのかを各地の取り組み事例をもとに考えていきます。SessionⅢでは，シンポジウムの問題提起を受け，6人程度の小グループを組み互いの取り組みを交流・共有していくクロスセッションを行います。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

Session 0　オリエンテーション　13:00-13:10　　AOSSA 6 階（参加受付ブースあり）
Session Ⅰ　ポスターセッション　13:10-14:10
Session Ⅱ　シンポジウム　14:20-15:50

「持続可能なコミュニティをコーディネートする－若い世代と地域を結ぶ－」
シンポジスト
一般社団法人みやぎ連携復興センター　髙橋 若菜 氏　ほか

コーディネーター
福井市教育委員会生涯学習室　齋藤 法之 氏
福井大学教職大学院特命助教　半原 芳子 氏

SessionⅢ　フォーラム　16:00-17:40

C2　地域と学校はいかに学び合うのか－大人も子どもも育ち合うコミュニティへ－（会場：福井大学文京キャンパス）

C2は福井大学文京キャンパスが会場です。

SessionⅠでは，同キャンパスで展開されているZone A「学校」，Zone B「教師」，Zone D「授業研究」とともにポスターにて実践交流を行います。SessionⅡでは，「地域と学校はいかに学び合うのかー大人も子どもも育ち合うコミュニティへー」と題しシンポジウムを行います。学校と地域のかかわりを捉え直そうとしている活動や，地域に暮らす大人たちと子どもたちとの結びつきを編み直す各地の取り組み事例をもとにテーマを問い進めていきます。SessionⅢでは，シンポジウムの問題提起を受け，6人程度の小グループを組み互いの取り組みを交流・共有していくクロスセッションを行います。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

Session０　オリエンテーション　13:00-13:10
SessionⅠ　ポスターセッション　13:10-14:10
SessionⅡ　シンポジウム　14:20-15:50

「地域と学校はいかに学び合うのかー大人も子どもも育ち合うコミュニティへー」
シンポジスト
上田市教育委員会　伴 美佐子 氏　ほか

コーディネーター
福井大学教職大学院准教授　宮下 哲 氏

SessionⅢ　フォーラム　16:00-17:40

Zone D 授業研究　教師の資本を授業研究によっていかに培うのか

― 子どもと教師の学びを支えるために ―

教師が専門職として生涯にわたって学び続け，成長し続け，新しい時代の授業づくりへの意欲を高め維持していくために，そして，未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えるために，日本独自の学校文化・教師文化である授業研究に大きな期待が寄せられています。しかし，ただ授業研究を実施すれば教師の指導力や授業づくりへの意欲が向上するわけでもなく，また，子どもたちの学力や生活力が向上するわけでもありません。何のために授業研究を実施するのか，いかなる授業研究を実施するのか，どのように授業研究を実施するのか，私たちはこれらの問いを常にもちながら，確かな戦略をもって授業研究を実施することが必要になります。

Zone Dでは前回に引き続き，「専門職の資本」※という考え方に基づいた「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマで各Sessionを進めていきます。未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えている実践者や研究者の方々，「専門職の資本」を磨きはじめた若い実践者の方々にご参会いただければと思います。

※「専門職の資本」は人的資本，社会関係資本，意思決定資本の3つからなり，これらは，教師が専門職として生涯にわたって学び続け，成長し続けていくために投資できる（磨いていける）ものです。Zone Dでは，授業研究の力を「専門職の資本」へ投資するという観点から，参会者の皆様と一緒に考えていきたいと思います。

Session 0　オリエンテーション　13:00-13:10
Session Ⅰ　ポスターセッション　13:10-14:10
Session Ⅱ　シンポジウム　14:20-15:50

「子どもと教師の学びを支える福井の授業研究 PART 2」
シンポジスト
高浜町立青郷小学校教諭　砂原 亘 氏
福井県立丹生高等学校教諭　調整中
コメンテーター
福井大学教育学部附属中学校副校長　牧田 秀昭 氏
コーディネーター
福井大学教職大学院准教授　木村 優 氏

SessionⅢ　フォーラム「子どもと教師の学びを支える授業研究の実践」16:00-17:40
A. 学校における授業研究の多様性から学び合う
調整中
B. 協働連携による授業研究
調整中
C. 高校における授業研究の発展
調整中

６／２６　Sun.　8:20-14:00

実践の長い道行きを語り　展開を支える営みを聴き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ9:00-10:40 ④報告Ⅱ10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ，その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が，省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを，より広く伝え合い，じっくり展開を聞き取り，学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉，表情，行為。その時々に感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け，活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場，実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが，その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし，必要事項をご記入の上，メールで送っていただく形で行います。受付期間は 5 月 10 日から 6 月 19 日を予定しています。
- 6/26 の sessionⅣの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
  6/26 の sessionⅣの参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。
- ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い，考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので，よろしくお願いいたします。プログラムの変更等があり得ます。最新の情報を福井大学教職大学院ホームページ http://www.fu-edu.net/をご確認ください。

※いただいた原稿のご所属等についてはすべて平成２８年３月時のものです。

【 編集後記 】ラウンドテーブル後,参加された方々から多くの声が寄せられ特集号を組むこととなりました。みなさんからの声（言葉）を編みながら,ラウンドテーブルでの経験が自分のなかでさらに深まっていく感覚を覚えました。原稿をお寄せくださった皆様ありがとうございました。（半原芳子・木村優）

教職大学院 Newsletter　No.84
2016.4.16 内報版発行
2016.5.14 公開版発行
編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp